

大正十年十二月發行

校友會雜誌

第貳拾號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第貳拾號 目次

○題字 松陰先生筆蹟擴大攝影	特別會員	金子乙助
○自覺 (岩田校長訓話の一節)	特別會員	金子乙助
○個性の批判	特別會員	黒川 兼次郎
○因果關係より見たる教化の事實	特別會員	石川 修三
○吉田松陰先生追慕會に講述したる要旨	特別會員	吉田 祥朔
○宇佐川正輝氏講演要旨		
○湯淺防長教育會理事講演要旨		
○河内陸軍中將講演要旨		
○田中陸軍大將講演要旨		
○梅屋七兵衛傳		
○東宮殿下の御外遊	第五學年	上野 玉市
○地理上より觀たる萩町の將來	第五學年	神田 壽治
○青年の覺悟	第四學年	頼野 孝夫
○菜根を咬め	第四學年	山田 清華
○時の夏	第三學年	田原 繁夫
○亡友を懐ふ	第三學年	吉村 繁成
○己は己にして己に非ず	第二學年	横山 幸生
○九月三日の朝	第二學年	山本 政輔
○菊ヶ濱の夕暮	第一學年	大島 忠雄
○秋と鏡鏡	第一學年	大和 忠雄
○日の皇子の出でました祝ひて	特別會員	中津江 延彦
○漢鹽草	特別會員	金子乙助
○英文	特別會員	金子乙助
○YOUNG JAPAN'S MISSION		
○A TRIP TO OMIJIMA		
○"DAWNING SPIRIT"		
○THE OLD POSTMAN		
○SERVED ME RIGHT		
○修學旅行記	第四學年	山本 赴夫
○萩町より大分市まで	第四學年	岡野 智教
○共進會觀覽……地獄巡	第四學年	頼野 孝夫
○耶馬溪より萩町まで	第四學年	竹内 忠雄
○會誌	特別會員	金子乙助
○劍道部記事	特別會員	金子乙助
○柔道部記事	特別會員	金子乙助
○清艇部記事	特別會員	金子乙助
○野球部記事	特別會員	金子乙助
○辯論部記事	特別會員	金子乙助
○書道部記事	特別會員	金子乙助
○畫道部記事	特別會員	金子乙助
○地歴部記事	特別會員	金子乙助
○理科部記事	特別會員	金子乙助
○陸上運動會記事	特別會員	金子乙助
○京都青年演武大會記事	特別會員	金子乙助
○山口縣體育大會記事	特別會員	金子乙助
○校友役員	特別會員	金子乙助
○校友會費取數決算	特別會員	金子乙助
○各中隊學科成績調査	特別會員	金子乙助
○武道賽稽古出勤狀況	特別會員	金子乙助
○校誌	特別會員	金子乙助
○明治神宮鎮座遙拜式	特別會員	金子乙助
○松陰先生追慕式	特別會員	金子乙助
○宇佐川正輝氏講演	特別會員	金子乙助
○角視學委員來校	特別會員	金子乙助
○伊東本縣視學員來校	特別會員	金子乙助
○發火演習	特別會員	金子乙助
○共通比較試驗	特別會員	金子乙助
○長距離競走	特別會員	金子乙助
○春日神社參拜	特別會員	金子乙助
○卒業式	特別會員	金子乙助
○陸軍記念日	特別會員	金子乙助
○賞品授與式	特別會員	金子乙助
○學友選舉	特別會員	金子乙助
○修學旅行	特別會員	金子乙助
○志都岐山神社參拜	特別會員	金子乙助
○毛利五郎男來校	特別會員	金子乙助
○陸軍少佐林茂清氏來校	特別會員	金子乙助
○松陰神社參拜	特別會員	金子乙助
○毛利五郎男來校	特別會員	金子乙助
○弘道館長來校	特別會員	金子乙助
○防長教育會理事來校	特別會員	金子乙助
○國司陸軍少將來校	特別會員	金子乙助
○河内陸軍中將來校	特別會員	金子乙助
○皇太子殿下御歸朝奉祝式	特別會員	金子乙助
○本縣視學來校	特別會員	金子乙助
○開校記念式	特別會員	金子乙助
○田中陸軍大將來校	特別會員	金子乙助
○感謝狀傳授式	特別會員	金子乙助
○更迭	特別會員	金子乙助
○上級學校進學者の優勝賞贈	特別會員	金子乙助
○卒業生死亡	特別會員	金子乙助
○寄贈雜誌	特別會員	金子乙助

山口縣立 萩中學校 校友會雜誌第貳拾號

談 叢

自 覺

(岩田校長訓話の一節)

OK 生筆記

今日は、自覺と云ふことに就いて、話して見たいと思ひます。一體自覺とは、己の立場己の本務を人力を借らずに覺ることでありませう。一二の例を擧げますと、歐洲大戰以後、獨逸は非常の打撃の爲に、社會の狀態は萎靡して、五拾錢の價格が五錢にも足らない様になつたのであります。昔は五十錢出さなければ買はれぬ品物が、今日では五錢の價もしないと云ふやうな貧乏になつて居ります。然るに日本はどうかであるかと云ふに、物價非常に騰貴して、拾錢しよつた物が、今は一圓出さねば買求められぬ有様であります。つまり獨逸は我國に比して實質が疲弊して居るのであります。獨逸のライン河の沿岸は、丁度我が長門峽の様な好風景の土地で、此處には澤山の別荘があるやう

です。所が之を所有して居る者は大抵外國の人人で、自國の人は此處に住むことは出来ないのであります。考へてもご覧なさい。我が長門峽の沿岸を、我々と毛色の異つて居る外國人が占領して、此處に別荘を構へて住んだとしたらどうでありませうか。我々は非常に憤慨し残念がるに相違ないのでありませう。なほ其の都會の内の料理屋には、一一獨逸の番兵が附いて居るさうであります。そこで獨逸人はその番兵に遮られて、酒一滴も飲みに行くことが出来ぬのであります。而して其の料理屋に行く人は皆外國人であると云ふ有様です。獨逸人は假令學校に於て敵愾心を教へられて居なくとも、國民が此の如き有様を見せ附けられては堪へ切れないので、必ず近い内に此の恥辱を雪がなくてはならぬと、上下一般非常に奮發して居ると云ふことが、岡田忠彦氏の報告にあります。私はそれを見て、實に恐しいことであると云ふ感強くしました。獨逸は實に鞏固な自覺を持つて居るではありませんか。

それから又、近頃大變に、亞米利加から我國に活動寫眞を輸入して居ます。我國では警視廳が一嚴密に之を検査して、風紀上一般公衆に觀覽させては不都合なフィルムは、ごしごし之を切棄てるのであります。さういふ事を聞いた亞米利加は、自分の國から良いと思つて輸出したフィルムが、日本に於て風紀を紊亂する者と認められて處處切り棄てられるのは、即ち自分の國の文化の程度が日本より低いといふものである。そこでよく日本の事情を調査して、そしてフィルムを作製しなくてはならぬと大に自覺して居るのであります。日本人が外國に輸出する商品は、見本だけを立派にして、後から送る商品は、粗製濫造のもので非難が多いのであります。これで日本に自覺があると

いはれませうか。亞米利加はフィルムに就ても、如上の考を持つて居るのであります。然るに日本は亞米利加から輸入するフィルムには、嚴重な検査を施しつゝ、自國から送出する商品には、粗製濫造が多いといふのは、至つて矛盾したことであります。

以上二つの例に依つて見ても、我國人はもう一層自覺して、うんとやる覺悟がいたのであります。青年たるものは、其の任務の重大なるを自覺して、奮發せねばならぬのであります。

個性の批判

特別會員

黒川 次郎

□私は教壇に立つた一瞬間、常に心頭に快よい衝動を感ずるのである、明るみのある、そして緊張した諸君の顔、それは私の講義から何物かを獲ようとする、諸君の天真なる欲求を暗示する。

□此の欲求こそ、實に人間の「生」そのものの活動力である、諸君は常に感動し、奮起し、斷行し、努力する、そして啓發せられつつある諸君の知識は、此の過程の指導者となり、監視者となり、整理者となつて、偉大なる人格と偉大なる事業とを、築き上げんとする。

□堅實なる意志、穩健なる感情、聰明なる知識、それは諸君の偉大なる人格が構成す可き、個性を意味するものであつて之によつて如何なる希望を達成し如何なる目的をも貫徹するのである。諸君は、自己の個性を自ら批判するの必要を持つ。

□單に、意志が強い弱いと云ふ觀察は、餘りに概念的である、耐久的に強き堅忍不拔の人もあれば、羸弱的に弱き薄志弱行の徒もある、一時的に猛烈なる勢力家もあれば、永續的に努力する勉強家もある、積極的に強き意志は、外界を壓服する英雄を産み、消極的に強き意志は、克己自制に優れたる勇者を造る。

□果斷ではあるが忍耐力が弱くはないか、忍耐力は有つても決斷力が鈍くはないか、前者は敏捷であつても輕卒に流れ易く、後者は堅實であつても疑惑に陥り易い。

□注意力は廣くとも淺くはないか、或は深くとも狭くはないか、前者は實際家であり交際上手であつても、信念に乏しく、後者は理論家であり學者であつても、偏屈に傾く。

□保守的の人の中にも、言行一致の主義の人もあり、頑迷固陋の我儘者もある、進歩的の人の中にも、社會改善の先覺者もあり、誠實を闕ぐ變節漢もある。

□感情の人だと云ふ言葉も、亦餘りに抽象的に過ぐ、樂天家にも活潑なる人があり、柔弱なる人もある、厭世家にも嚴肅なる人があり、無元氣の人もある。

□感動し易き人は、意志を驅つて活潑敢行の性向を顯し、感動し難き人は、意志を抑壓して柔弱無元氣となる。

□興奮し易き人は多情多恨であり、興奮し難き人は冷血死灰、或は卑屈因循である、前者の劇しき者は、英雄と雖も運命に翻弄せらるゝこと多く、後者の極端なる者は、豪傑と雖も畏敬崇拜を享け得ない。

□深き印象を持つ者は、或は玲瓏珠の如く、或は莊重錮の如きも、過度の不快情調に捕はるゝ者は、猛獸毒蛇の如く執拗である。

□知識の發達も、亦其の方向に於て多種多様である、機械的の記憶に強き語學者、論理的の構想に富める科學者の如き、其の一例である。

□分析的才能は系統的自然研究者幾何學者の頭腦に、觀察的才能は教育者社會學者の頭腦に、發明的才能は藝術家工業産業及び科學の發見者發明者の頭腦に、思索的才能は詩人哲學者の頭腦に宿る。

□以上は心理學の分類に倣つて、個性の一般を概説したに過ぎぬ、諸君はより能く周密に、より深く慎重に、自己の個性を自から批判するの必要を持つ、そして進んで其の特性を涵養し、其の缺陷を陶冶し、以つて自己の將來を社會の上に、大光輝あらしめねばならぬ。

因果關係より見たる教化の事實

特別會員

石川修三

因果關係といふ點から、教化の事實を少しく哲學的に考察して見よう。先づ因果關係は、自然界でいふと、太陽熱と地上萬物との關係が最も著しい。

太陽が熱を出して植物生ずといふも、熱をとつてしまつた太陽は別に存在しない。然し植物生ず

といつても、これを除いては太陽の實體はない。これ等の事全体を稱して、太陽といふのではない。又寒さが水を凍らしめるといふのは、抽象作用であつて、この場合水を離れて寒さはない。寒さは宇宙全体の變化であつて、その變化が同時に伴ふのである。又火が紙を焼くといふ場合に、紙をはなれて火といふ實體はない。火が紙を焼くのか、火が焼けるのが紙か、火が紙を焼くとか、紙が灰になるとかいふことをとつては、火はないではないか。別々に前後になつたものはない。即ち一体にして、分離すべからざる要素を分解して、かく観するのである。これはまさしく抽象作用である。吾人は内界をさきにして、外界の事を見なければならぬ。因果關係の真相を親しく知るといふことは、内面の生活を親しく知るといふことでなくてはならぬ。

内界とは、人と人との因果關係の行はれる所で、教師が生徒を教化する事實は、この中で最も著しいものである。教師の働は、生徒に如何に作用するか。一方から他方に如何に移つて行くか。教師は生徒に向つて、何事かを言ひ、又は行ふと、それが生徒の内界に、或る事柄を起しつゝあるのである。教化の事實とは、教師の言行と、生徒の内面の變化との、二つの分つべからざる際をいふのである。其の際をわけると、教師は教師で仕事をし、生徒は生徒で、内面で或仕事をなすつゝあるといふことになる。生徒の内面に、或變化が起るといふことをはなれて、教師は教化を行つたといふことはいへぬ。又反対も然りである。即ち何れか一方では、教化にはあらぬ。前例をとるに、火が紙を焼くといふことも、紙が焼けつゝあることをはなれては、火はないと同様である。若し兩者の間に、前後を分てば、別々な事件となる。別々の事件が、如何にして因果といふことにあるか。

教師の力が、自身をはなれて移り出るものか。然してどうしてその力が生徒の内界にくひ入るか。これは思議すべからざる事に屬する。かの力の出入、又は不可思議なる兩者をはなしては考へ得られぬ。そこで因果になるのである。即ち一體ではなし得ざる所に、因果關係は成立する。教師は生徒に對して、何事かをなし、生徒はこれを受して、内界に何事かをなすといふも、畢竟するに、兩者とも自分の事を爲すに過ぎぬので、兩者間に、一方より他方に移り行くといふが如きことは、少し思慮を深くすると、考へ得られない。故に教化等は、意の如くなるものでない。唯自分の事を爲すより外に方法はない。生徒の内界の變化は、教師の如何ともすることが出来ぬものである。又生徒の方からいへば、意志して教師の力を得んとしても、不可能である。教師は唯自己を盡すのみである。生徒も心を盡して、教に一枚になるのみである。要するに、兩者とも誠になるより外はない。此の兩者の誠にならんとすることが熟すれば、自己を忘れて只管其の事に專一となる。教師生徒の隔を失ふて一となるのである。この境に到ると、教師もなければ生徒もない。雙方の考が合すれば、雙方もない。其の境地が、眞に教化の事實があらはれる時ではないか。この二の働が合すれば、最早二の働ではない。其の時には間隙がない。唯誠に委せて働いてゐる。其の時教師から生徒を動かすといふ借越がない。又生徒が骨折つて教を受けるといふこともない。彼我純粹なる時に、誠に合するものである。物の合體する状態は、皆かくあるべきものである。一が他を動かす眞相は、一とか他とかいふ區別がなくなつた時のことである。換言すれば、統一を得た時が、眞に因果の行はれた時である。實在性を得たとは、因果の行はれたことをいふのである。因果とは、分析す

べからざる一體の中にあるのに、後から分析して、能動とか受動とかの部分に分つは、寧ろ倒になつてゐる。せらるゝこと、することがなくあつた時に、化がある。かゝる内面生活から見ても、自然界の因果も、解釋することが出来る。人を教化すると思ふことが、教化の行はるゝ妨となる。火は紙をはなれては存在しない。焼ける時は火でもなく紙でもない。即ち一體である。約言すれば、教師と生徒と一致融合したる境地に於て、眞の教化の事實を發見するのである。

吉田松陰先生追慕式に講述したる要旨

特別會員 吉田 祥 湖

今を去ること丁度六十二年前の本日は、我等が平常敬慕する所の吉田松陰先生が、憂國慨世の志を齎して、江戸傳馬町の獄舎に於いて、刑場の露と消えられた當日である。我等は日夕校門を出入して、先生の士規七則の刻されたる石碑を仰ぎ、其の貴き教訓を想起するけれども、取別け本日は、恰も先生の御正忌であつて、最も記念すべき日柄に相當するので、一層心に感ずる所の印象が深い。この記念日に際して、靜かにその當時を追想し、先生の人格や事業を偲ぶといふことが、即ち精神の修養上、最も大なる効果のあることである。申すまでもなく、先生は古今稀に見る所の性格の高い御方であつて、實に我が國の大偉人であり、否世界的の偉人物である。而してこの偉人が、此秋の地に出でられた。即ち時に前後はあれど、御互と其郷國を同じうして居ることは、實に

此地方の名譽であつて、御互に肩身の廣いといふものである。従つて先づ先生の人物を一通り知悉し理解して、その遺風を景慕し、その教訓を服膺して行くといふことも、亦他地方の人よりも、御互は一層深くなければならぬと思ふ。諸君は既に屢先輩の方よりして、先生の御事蹟を聽かれたであらう。又先生の一代の言論行狀をしるした書物も、大分世に出て居るから、それらに依りて先生の傳記の大體は御承知のことと思ふのである。乍併先生は樸學三十年と自分に言つて居られるが、その御一生は僅に普通人生の半で甚だ短い。今の世でいへば、まだ大學を卒業した許の年輩である。然るに此の短命の内に、通常人の二生涯三生涯を経ても、容易に成し得ざる仕事の多くを成し遂げて居られる。即ち先生は兵學者である。國學漢學の造詣が深い。蘭學も修められた。地理や歴史にも明るい。要は文武兩道の達人である。又社會上の事業より見る時は、一段の經綸家であり、また偉大な教育家であつた。更に或意義の文章家であるともいへる。その著述の豊富なる、言論の暢達せる、いづれとして非凡ならぬはない。先生の學識達見は、その一を取るも且つ普通以上であつて、凡人では出来ぬ。况んや其の至誠天地を感動するに足るの君子人たるに於てをやである。故に今茲に先生の一代を語り盡して、その精神面目を傳へるといふ様なことは、到底私どもの出來得る所でない。それは絶對不可能のことである。先年薨去せられた子爵野村靖さんなどは、かう謂つて居られた。特に椽大の筆を揮ひ、高尚な議論を立てて、先生の傳記を作るの要はない。先生の偉大な精神は、人力又は筆力を借るに及ばずして、自然に後世不朽に耀くものである。傳記とか碑文とかに依つて、人に知られるものとは、全然其趣を異にして居る。又先生としても、恐くは後人の手

に成れる傳記其の他に依つて、己の精神を後人に知られることは、好まれぬであらう。寧ろ自分の手に成りし議論文章詩歌隨筆等の類に依つて、己の精神面目の世に現れ人に知られることを喜ばれるであらう。これが先生を知る上に於ての一番適當な方法で、つまらぬ傳記等に優ること萬々であること、かういふ様に、故野村子爵は話された。さてその先生の著述も数多い中に、先生は、苟も假の思想や無意味の者を以て、即ち假想的に筆を弄んで書かれたものは一つもない。其の文其の詩、先生御生涯の短いのに比べては、非常に澤山あるのである。しかし其の一文一詩といへども、皆時に當り事に臨みて、止むを得ずして筆を執り、必要に驅られて書かれたものであつて、殊更にこれを作つて、才を衒ひ名聲を世に售るといふ如きことは、夢にも先生にはない。殊に先生は御承知の如く、天性崇高の精神を御持になり、如ふるに質實なる實學を研究せられ、何事も至誠を以て之を貫くといふ方で、所謂、至誠不動者自古未有之有矣と云ふ此の言につきて、最も工夫を凝らされたので、終に其の初志を一貫して、棺を蓋ふに至られた。随つて先生の筆にせられた文章詩歌は、皆熱誠の溢れ出たので、即ち先生其の人の發露したのである。そこで先生の精神面目を知らんと欲するものは、宜しく先生の必要上書かれた所の、至誠の凝結ともいふべき先生の著述を精讀會得すべきである。或は幽囚録であるとか、或は士規七則であるとか、或は七生説であるとか、或は留魂録であるとかは、皆先生の精神人格を窺ふ上に於て最も貴重なる文字である。(中略) 私はこの留魂録について、少し委しく陳べて見たい。それはこの留魂録についての話が、今日講話の主題であるからである。留魂録といふ本は、こゝに所持して居る石版摺の小冊子で、原本もこの通である。此

の一篇は前に云ふ如く、先生が死に臨まる一日前、即ち安政六年の十一月二十日、當時の陰曆にして十月二十六日の黄昏時に、書き終へられた先生の書置である。乍併勿論普通世にある書置の類ではない。たゞ身を殺して志を天下後世に伸べ、後の人をして感奮興起せしめんとするが其の本旨である。されば此の今はの際に書き残された留魂録の一篇こそは、最も先生の御精神を窺ふことの出来る大文字で、甚だ貴ぶべきものである。さて安政六年といへば、一度日本の歴史を讀まれた諸君は、大概御記憶のことであらう。戊午の大獄と稱して、我國の有史以來未曾有の不祥事が演ぜられた。即ち時の大老井伊直弼と云ふ人が、その立場を切抜ける必要より、先々帝孝明天皇の御勅旨を受けずして、擅に外國と修好條約を結び、それに因りて生ずる所の國論の沸騰を抑へるが爲に、當時自分の政策に反對する天下の志士勤王家の多數を、一網打盡に捕縛して、これを悉く江戸に送らしめて、重きは死刑に、輕きも追放といふ様な嚴刑に處した。先生も矢張當時の志士として、幕吏に目指されて居られたから、これ亦其の難に遭はれ、此年の五月二十五日に、網乗物にて、江戸へ向けて萩を御出發になる。この日は梅雨冥濛の中を、門人故舊は涙を揮つて郊外に見送る。彼の先生が大谷の涙松で、「歸らしと思ひ定めし旅なれば」と詠まれたのも、此の時なのである。かくて愈萩を離れて、山陽道を江戸へと指して上られた。六月は道中で過ぎ、江戸へ入られたのは七月初でもあつたらう。その七月九日に初て幕府の評定所今の裁判所といふべき所へ呼び出されて、三奉行立會での取調を受けられ、かくて直に傳馬町の獄舎に下された。それから八月九月と經て、十月十六日に至りこの間二回の訊問ありて、愈幕府の方で、先生の犯罪が確定し、口書の讀み聞せあり

て、その二十七日四つ時、傳馬町の獄舎で處刑に遭はれた。その前日に此留魂録は出来たのであつて、留魂録の名は、この篇の初に「身はたとひ武蔵ののべに朽ぬとも留置まし大和魂」と記されてあるこの和歌の意よりして、名づけられたのであらう。また此の一首の和歌が、この篇の内容を縮寫結合したものと見られる。さて此の書の内容は、今一々茲に説くことは容易でないから、唯其の中の二三節を紹介して、全篇の意義に想到したいと思ふ。勿論順序を追うての話ではなく、特に注意すべき事項を撮説するのである。

さてその一は、七月九日の、先生が幕府の評定所に呼び出されて、三奉行出座の上で、訊問を受けられた事である、その訊問の條件は二つある。一は其方は梅田源次郎が長州に下向の折に、面會した相であるが、何を密議したか、二は京都の御所内に落交即ち今の所謂投書があつたが、その手跡が其方に似て居るといふが、覺があるか何うかといふのである。さて之に對して先生の心事は此篇に、「夫レ梅田ハ素ヨリ奸骨アレハ余與ニ志ヲ語ルコトヲ欲セズ何ノ密議ナリヤサヤ吾性光明正大ナ好ム豈落文ナリノ隠昧ノ事ナリヤサヤ」と認められてあるが、梅田源次郎といふ人も、當時の勤王の志士の中で、録々たる人物である。光明正大の御方であつて、當時の時勢に於きて、投書などせらるべきでない。されば先生は、この幕吏の訊問に對して、憤然として過去六年間、幽囚中の苦心の存する所を陳べ、終に大原三位卿の西下を請ひ、井伊の腹心鯖江侯間部下總守の上京を道に要撃するの策を立てたといふことを自白に及ばれた。さてこの自白で三奉行も驚いた。此の時先生の考では、大原卿西下の事や、關部老中要撃の事などは、幕府も既に薄々間諜で知つて居ること

であらう。そこでこれは隠し立てをせず、一々明白に申立てた方が宜しからうと思はれたのである。然るに先生が自白せられた此二件は、幕府の未だ嘗て知らざる所で、三奉行も聽いて驚いた。要するにこの一事で、先生は重罪人であるとして、直に獄舎に入れられたのであつた。次に又先生が思はれるには、幕府にて一圖知らぬ所を、強いて自白して、多人數に此事件の嫌疑が蔓延して、多くの人々を傷めるのは、所謂毛を吹いて瘡を求むるの類であるから、といふので、この鯖江侯要撃といふのを、要諫と替へて居られる。又自分と往來の諸友、連判同志の姓名等も、成るべくは秘していはなかつたと記して居られる。これは先生自身は死することは聊か厭はぬが、後の自分と志を同じくする者をして、其の事業を遂げさせやうとの考である。幕府余一人のみを罰して、一人も他の連判者に及ばないのは、實に大慶であると思つてある。要するに先生は身先づ國に殉じて死すれば、必ずこれに依つて奮起する後人あるべきを信じて居られたのであらう。それから又先生は、是より先、萩を發するに先ち、既に死を決して居つた。然るに六月の末、江戸に入つて見れば、天下の形勢は未だ全く悲觀するを要せぬ。そこで又生きられるものならば生きて見たいと思ふた。なれども三奉行が、其後十月十六日の裁判で、強いて罪を造りて、死罪に陥れる様な素振があるのを視ては、もはや生きる心は先生の胸裏から去つてしまつた。もう全く死を決した。死を決して見ると、少しも心に動搖がない。是れ亦平生學問の徳であるとかう書いて居られる。

それから今一つ私の注意を引くものは、此篇の中に、「吾性激烈怒罵に短し、務て時勢に従ひ、人情に適するを主とす云々」とあつて、先生は幕吏の取調に遇ふや、決して激烈なる言辭を用ひずし

て、先づ穩に幕府が執りし違勅の措置も、亦止むを得ざるものであるを陳べ、然る後に當今の場合に處する自己の意見を述べた。故に幕吏も敬意を以て迎へ、甚だ怒罵の言を用ゐざりしことをいうて居られる。先生は御肖像に對すると何だかむづかしい様な御方に思はれるが、實は甚だ穩で、常に温顔を以て人に接するといふ風な御方であつた。聞く所によれば、先生は常に前漢の張良の人となり慕うて居られた。張良は容貌婦人の如しといつた様な人で、而かも高祖を助けて漢室を興した豪傑である。その温厚沈着婦人の様であつたからこそ、彼の秦の始皇帝に四十斤の鐵錐を博浪沙中で擲げつけることが出来たのである。私は世の威丈高に徒らに慷慨するものを好まぬといつて居られたといふ。されば先生は決して激烈の人ではない。寧ろ激烈は嫌いで極て隱和な御方であつたのである。平生沈着でなければ非常の時に狼狽するものであるから、粗暴過激の事あつてはならぬと言ひ聞かして居られたといふことであるが、この留魂録の中を見て益其然かありしことが知られる。さて此一篇の書置の末に至りて、「心なきこと種々かき置ぬ思殘せることなかりけり」「呼だしの聲まつ外に今の世に待へきことなかりける哉」などいふ五首の歌がかいてあつて、終りに十月二十六日黄昏書二十一回猛士としてある。而してこの留魂録を御書きになる前に、既に幕府の自分等に對する措置を漏れ聞かれて、其死刑に遭ふことを御知りになつたから、御父上や御兄上などへ書き送られた最後の書状などもあることは、御承知の通りである。斯様な次第で、初め幕府奉行等の案文では、先生を流刑に處するとしてあつた相であるが、井伊大老はこれを改めて流を死に更へたこのことで、翌二十七日即ち現時の曆に直して、今日の午前十時頃死刑に御遭になつた。越え

て二十九日、門人の木戸伊藤などいふ人々が、小塚原の回向院といふ寺で、先生の死骸を幕吏より受取つたが、面貌生きるが如く、笑顔を帯びて居られたといふ。その臨終の立派であつたことが察せられる。さて松陰先生が逝かれてから、今に至つて既に六十有二年、この間維新の大業も出来、先生の希望せられた如く、幾度か國威を海外に耀かし、今日の強國となつたのは勿論、上聖天子の御稜威と、下國民の忠勇とに由ることであるが、先生の偉大なる精神も、其の根元の一となつて居る事と信ずる。徳宮蘇峯氏が、松陰先生の傳記を著して、先生の人物を評して、眞實の人といつた、唯に眞實の人と云ふ。以て先生の人物を盡して居るか何うかは知らぬが、先生は勿論眞實即ち誠の人であつた。虚の人でない。假作の人でない。世の中には虚の人假作の人が多い中にも、先生は確に眞實の人であつた。抑世の人の賢不肖は天賦であるが、眞實の人となることは、各人の心掛で出来る。それには智慧學問は、必ずしも必要とせぬ。何うか御互に先生の人格を模範として、眞實向上の一路を進みたいものである。「一家仁一國興仁」で、我れ五百有餘の人々が、皆この眞實の人たらんか、國家社會の大なる福音である。諸君今日此祭典に際して、先生の靈前にぬかづき、過ぎし六十餘年前を追想して、何物か心に會得せらるるものあらば、先生在天の靈も定めて悦ばれることでありませう。

世界一周自
轉車旅行家 宇佐川正輝氏講演要旨

私はこれまで、十萬哩を自轉車で踏破しました。足は鐵のやうに堅い。それに柔道の素養があるから、甚だ氣強く感じました。私は旅行中人種差別撤廢を三四やつた。從來の日本旅行家が人種差別を受けたのは意氣地がなかつたからであります。例へば白人の劇場に日本人が百二十圓と云ふ大枚の金を出して、一等席のバスを買つてそれに入らうとする。どうすると白人の輕蔑的な視線は、悉く此の日本人の上に集る。すると意氣地のない日本人はそれには堪へかねて、こそころそこを逃げ出す。甚しきに至つては、正當の入場料を拂つてゐるにも拘はらず、案内者は日本人の一等席への入場を拒むのである。日本人は案内者にさへも侮蔑されて、一言でへこたれてしまふ。情ないではありませんか。一體人種差別に法律がありますか。私の定めはあるが、世界的に日本人を排斥せねばならぬと言ふ法律はないのである。たゞ白人の權暴である。だから國旗の尊嚴を知れる日本人は、これに辟易せぬのであります。勇氣ある日本人は、何時でも之を撤廢して、國旗の尊嚴にかゝる様なことを避けることが出來ます。之を撤廢することの出來ぬのは、第一外國へ物貨の仕入に行く自己本位の我利我利な商人連であります。

嘗て私は大正五年英領亞弗利加殖民地のケープタウンに行つたことがあります。こゝに出て來て四日目に、私は港の沖に日意旗を掲げた軍艦を一隻見た。その時の嬉しかつたことといつたら、私は飛び上つて喜びました。早速泳いで行かねばならぬと思つたが、随分の距離があるからそれが出

來ぬ。そこで近所の理髮店に飛びこんで譯を話して、あの軍艦に行きたいが周旋してくれぬかと聞いて見た。所が主人は日本人と聞いて一足の破れ靴を持つて來て、これは四年前に、一日本人が忘れて行つたものだと言ふ。私はまた此の靴を見ただけで非常になつかしくなつて來た。主人は快く承諾して、一人の土人を雇つてくれました。そこで翌日水とパンとを用意して行くことにしたがなかなか事が捗らぬ。そうする内に軍艦からボートを漕いで來た。上陸したのは一人の將校と一人の下士であつた。嬉しさに飛んで逢ひに行つて、互に嬉泣きに泣きました。この軍艦は帝國軍艦筑摩で、將校は筑摩の航海長澤田徳治氏で、下士は井谷上等兵曹でありました。そして四時間後には出帆して朝日艦と共に地中海の方を終へて、印度洋へ行く所であつた。そこで私は、駱駝の卵の中を抜き取つて、それへ書物を入れたのを、我東京日々新聞へ届けて貰ふ様に、航海長に頼んだら、航海長は此の軍艦が何時沈没するやら、自分が何時戦死するやら分らぬが、無事に歸りさへすれば届けてやらふと言はれた。ふと見ると井谷兵曹が指を傷めて居る。私はそれを見て大變だと思つた。これは熱帶地に行く者は必ず注意すべきことで、鼻孔耳孔等へ一種の蠅が這入ると、其の人は直に變死するのである。私は此の事を桂田富士郎博士に聞いてゐたので、常に鼻耳へ綿で栓をしてゐた。井谷兵曹の傷もそれであるので、捨てて置くに危険だから、そこらに醫師は居らぬかと聞くに、當地に血清療法研究所があると言ふ。この研究所は、英國が莫大な金を投じて、熱帶地方の惡疫を豫防する爲に建てたものであります。そこへ行つて診察して貰はうと思つて、三人で出掛けて行つた所が、門に黒ん坊が立番して居て、「日本人なら靴を脱げ」と言つた。自分は實に癩に障つて

堪らぬ。それは誰が言つたかを聞くと、「ホームマン博士が言つたのだ」と言つた。澤田少佐は何を言ふのかと聞いたが、餘り侮辱的な言葉故、有りのまゝ言ふことも出来ず黙つてゐた。その時英國の男子と女子と二人来て、そのまゝづつと入つて終つた。そこで私はもう我慢が出来ぬから飛び込んで行つて、副マネージャーに面會して詰問してゐると、院長ホームマン博士が出て来て、「そんなに腹が立つか」と飽くまで侮辱的な言を吐くから「何故同盟國たる日本人を差別しますか」と詰問した所が、院長は啞然たること暫くにして、助手に命じてブックを持ち來らしめ、それを聞いて、此の前に來た日本人は、靴を脱いだと言つた。私は國旗の觀念があるから、黙つては居られません。そこで「何か證據があるか」といつたら、その帳を開いて見せてくれた。そこには大日本毛織物會社長……と云ふ名が書いてあつた。此の人は戦前羊毛の買入の爲めエロアのカイロからケーブタウンへ行きまして、此の病院に來て靴を脱げと言はれたから、靴を脱いだのである。此の時羊毛會社の社長の心理には、國旗の尊嚴と言ふ觀念が無つたと思はれる。自分の利益の外には何物も無かつたのかも知れぬ。此の時國旗の尊嚴を知れる者は何で脱靴しませうか。

日本の柔道擊劍は世界を風靡して居る。森岡騎兵第二十四聯隊中隊長遠山大尉が、嘗て獨逸で無頼漢等に害を加へられんとした時、「俺は柔道を知つてゐる」と言つたら、彼等は皆逃げたといふことである。しかし實際は彼は柔道を知つてゐかつたさうである。私はセイロン島でこれと同じ様あつた。しかし私は實際に米國の海軍中尉を投げつけたのであります。私はカルカッタ三井物産支店重役福田氏の添書を貰つて、セイロン島のセラーム氏の宅へ行つた。セラーム氏は、

マルラン大學出身の、マスター・オア・アーツであつて、無妻で富豪で快男子である。私が行くとき非常に喜んで迎へた。私は氏の家に居る時鶴を撃ちに行つた。その時私は一足先きに出て行きました。所が米國太平洋艦隊の巡洋艦チャイナ號の乗組員等が上陸して居て、私の日章旗を見て、チャップ・アツプと言つて侮辱した。私は實に癪に障つた。が我慢して將にスタートしようとする時、其乗組員の中尉が檣樺子の杖を以て私の自動車を覆した。此刹那私は早くも飛び降りて、中尉をそこへ投げつけてやつた。他の奴等はちつとも抵抗し得なかつた。七分間許すと、セラーム氏と老中尉とがやつて來た。そしてモーターの壞れたのを見て私に問ふたから、私が事情を話すと、セラーム氏は「殺してやれ」と言つた。乗組中尉は握手を求めて謝罪したが、セラーム氏は承知せず、「彼は勇敢なる日本人である。これから領事館に行つて交渉してこねばならぬ。事によるとこれは國際問題になるかも知れぬ」と言つたが、遂う遂うどうやら解決して、「今後は決して侮辱せぬ。そしてモーターは償ふ」と言ふ謝罪文を書かせた。この謝罪文は今も外務省にある。兎に角柔道の手腕はこんなものであります。南洋方面へ發展して日本帝國の領土を開拓するには、是非柔道が必要と思ひます。随分長くお話ししましたがこれでたきます。終に臨んで一つ諸君に見せるものがあります。私の恩人であり、且、鞭撻者である。それは、即ち、此の國旗であります（縦二尺横二尺五寸位の大さの國旗を示す）實に此の國旗は、宇佐川正輝の全身である。全く故國を去つて獨旅行する私に取りて只一人の友人である。私は旅行中旅館へ泊ると、早速床の所へ此の國旗を飾る。そうすると訪ねて來る外國人も室に入ると自然感に打たれて敬禮する。これが國旗の尊嚴であります。さらば

諸君よ、益壯健にして山口縣の名譽を更に高くせられんことを祈ります。

湯淺防長教育會理事講演要旨

吉 武 惠 市 筆記
石 津 兵 太 郎

私は只今岩田校長より紹介せられました湯淺であります。今日此處に將來有望の元氣ある諸君と會してお話することの出来るのは、私の誠に愉快に存する所であります。

當地は交通不便の爲、長らく参つたことはありませんが、學生の時三回ばかり来たことがあります。第一回は明治二十四年と思ひますが、修學旅行で當地に來た時、滋賀縣大津に於て、露國皇太子が兎漢の爲に傷害せられたといふ一大椿事が突發したので、直に山口に歸つたといふ深い印象があります。第二回は明治二十八年で、此時は日清戦役漸く終を告げ、伊藤公と李鴻章とが下關春帆樓に於て講話談判を開いて居たのであります。確か三月三十一日と思ひますが、私は山口を發して當地に來る途中、李鴻章が兎漢の爲に狙撃せられたといふことを聞きました。當地に三回來た中で二回まで椿事の起つたことを聞いたのであります。此の第一回目は、我國力未だ十分伸びず、然るに露國の勢力は東に南に波及し、其の侵略主義を發揮しつゝある時に際し、露國皇太子が我が一警官の爲に傷害せられたので、上下大に驚き、畏れ多くも 先帝陛下は非常に御宸襟を惱ませられ、親しく露國皇太子を御慰問遊ばされました。第二回は日本開國以來始めて國運を辱して外國と戦う

た時でありましたが、幸我が國が勝利を得て、下關條約の締結を得んできましたに、又々李鴻章を狙撃したので、第三者たる列國の感情如何と、我國民は之を恐れて居りました。此の如く當地に來る間に、再度もかゝる椿事を聞きました事や、又松下村塾に於て松陰先生の令兄なる杉民治氏に會見して、色々の教訓を受けたことなどは、深く心に銘して忘れない所であります。當地に於て今此の記憶を呼び起すのは、大に興味あることであります。さて特に岩田校長とは、山口高等學校在學中よりの親友であり、又多年教育界に盡力せられてゐられるので、其の學校を觀察するといふのは、大に私の好奇心をそそつたのであります。今諸君の受業を見ましたのに皆元氣の善いのに驚きました。嘗て縣下中等學校の生徒の體格表を見て、本校の生徒は大に他に勝れてゐることを知つて居りました。今こゝに逢つて見るに、實際元氣であります。又學校の課業に對し、諸君が努力せられし跡を見て、世辭ではありませんが、諸君の實際の能力のあることを知りました。此の能力あり努力あり元氣ある諸君が、多く出でて國家を脊負うて立たれるのは、眞に喜ばしい事であります。私は諸君が十分完全な人物にならん事を希望するあまり、所見を陳べてお話ししたいと思ふのは、外ではありませんが、諸君もご存じの通り、山口縣は、從來偉大な先輩を出して居ります。此等先輩は、嘗ては幕軍を四境にうけよく之と戦ひ、終に維新の鴻業を翼賛し、國家の要路に立ちし事は、諸君の熟知する所で、今更私の言ふに及ばぬこと、思ひます。其の結果として、山口縣の者は餘り先輩に依頼し過ぎはせぬかと云ふことは、種種の事實や問題で認めます。政治上の問題を論ずるものではありませんが、山口高等學校設立希望の際にも、縣にゐる人は殆ど何等盡力せず、只在

來の先輩のみを依頼して敢へて願みず、餘りに冷淡な様な感じがありました。此の理を尋ねるに、存京の人が何事もやつてくれるであらう。東京には防長教育會があるからどのみ依頼してゐるからであります。又鐵道問題に於ても、萩は殊に各地に出づるに交通の聯絡不十分で、皆大に困つてゐるので、私どもも同情に堪へず、一日も早く鐵道の完成することを渴望してをります。試に地圖を披播してご覧なさい。本縣と鹿兒島縣とは、どちらが鐵道が多くありますか。山口縣は北部は山が高く鐵道が布かれないのですか。又人口が少いのですか。否、鹿兒島よりは人口も稠密で山も低いのに、鐵道が彼地に多くて、山口縣に少いを見出されるであらう。加ふるに當地は三十六万石の城下でありながら、まだ鐵道の敷設されないといふことは、他に見ない所であります。これは如何なる理由でせうか。萩は偉大な政事家が出て居ますが、一般に外の大なる問題に心血を注いで、内一局部の小さい問題には關して居られなかつたのに、縣下の士は此等に依頼して、又敢て願みなかつたからであらうと思ひます。以前は議會で、西部山口縣の鐵道、殊に長州線を完成して、島根縣に聯絡し、大嶺線を延長して正明市に至る案が、政府で定り、議會に出すことになつてをりました。其の時當地の有志の士が、多く上京して運動してをられました。私も鐵道院に行つて尋ねました所が、監督局長が卓上に大きな地圖を廣げて、「山口縣は藩閥藩閥と世上から非難せられて居るにも拘はらず、鐵道敷設の點に於ては、非常に他に劣つて居るのには驚かざるを得ないが、しかし大嶺線は遠からず完成するであらう」と云はれたので、其の言葉を聞いて安心して歸つたことがあります。

以上は一例に過ぎませんが、私が思ひますに、山口縣の人々は、あまりに先輩に依頼して、却つて此の不幸な状態にあるのでありませう。をれにも拘はらずまだに自覺せんのは、武陵桃源の夢を貪つて居るのではないでせうか。此に於て諸君に希望する所は、諸君は決して他人に依頼するといふ様な心を起してはならんと云ふことです。若し此の依頼心あることが山口縣の通弊ならば、宜しく之を打破して、獨立獨歩自ら進路を開拓し、自力で進む様に努力しなければならんと思ひます。防長教育會は、本縣人にして、優良の成績を以て中等學校を出でながら、學資缺乏の爲に、上級學校に進むことの出来ない者に貸費を許して居りますが、斯ういふ例は他に見ない所でありませう。然るにあまり効果がないのを見れば、依頼心を助長するのみで、却て害がありはせぬかといふことを考へて見ました。そこで萩の爲山口縣の爲否國家の爲に切に諸君に望む所は、依頼心を捨て、自ら進路を開拓し、將來人格の高い、意志の鞏固な立派な人となられんことでありませう。

河内陸軍中將講演要旨

柴村 田 敏 曠 筆記

私は萩に於ける感想を少し話して見たいと思ひます。一般に學校生徒がよほど質素で、都會の學生によくある浮華輕佻な所がない。それは諸先生の指導の宜しきを得るによるであらうが、又皆の心懸がよいからであらうと思ひます。私は過去の少年時代のことを考へると、萩人士の質實剛健は

先賢の賜の今に残つて居るのではないかと思ひます。此處にちよつと私の老婆心から諸君に注意して置きたい事があります。といふのは兎角青年時代は、剛健の意味を取り違へて、亂暴となり易い。學生が學校の規則や、先生の教訓を守るのは當前の事である。然るに敢へて聞き苦しい見苦しい事を外ではする。これは剛健ではありません。我々の青年は、よほどへんてこな時代で、膝頭まである丈の、肩の上の短い着物を着て、裸に近い風をしてゐた。併しかういふ風態が剛健とは、あまり極端であらう。一體諸君の内に、メホンを破つて得々としてゐる連中はありはしません。ありはしますまいが、ひよつとあるとすればそれは大きな間違である。兎に角全體に於て諸君の有様が非常に美しく見える。此の點はいよゝゝ維持せられ、又身體にも十分留意して貰ひたい。山鹿素行の如きは、毎日毎日木こりをやつたさうです。學生が毎日毎日木こりをやると學科がぬけるから勸めはしないが、外の事で何でもよいから身體を鍛練しなさい。(中略)

近時世界の有様を見るに、西洋の思想が色々盛に起つて、異人が非常ににらさうに見える様だが、そんなに異人を崇拜するには及ばん。此頃は日本中、古の趣味が缺けて居る様に思ひます。皆が日本の研究を疎にして外國の事はかり學ぶからさうなるのだ。大阪で聞いたが、或人が盗人が多いいといふので、財布に丈夫な紐をつけて首に掛けて、これなら大丈夫だらうと思ふてゐた。所が何時の間にか盗まれてゐたことである。實際此等も表面にばかり丈夫な紐を付けても、心に紐を付けなかつたから苦もなく取られたのだ。此の様に心に油斷があると何時どんな目に遭ふか分らないのである。此頃は何かといふと、心が物質の方に移る。物質の方も固より必要である。幾ら日本

人でも餓れては何事も出来ないのである。しかし心の修養はこれより大事である。そこで學生の必要とする所は、元氣の涵養である。元氣の涵養といへば如何にも困難の様であるが、目標を高く定めて、之に向つて一圖に努力さへすれば出来るのである。親が魚を賣るから子供も魚を賣らねばならんといふ様な規則はない。親は乞食の様な生活をしてゐても、子供は實力があり心掛が美ければ、立身することが出来るのである。しかし目標とするものは高くなければならぬ。私は私の子供にも目標を高く持てと言ふのが常である。山口縣人の長閑薩摩人の薩摩等色々黨を立てて相互に争つてゐるが、それが小さい國を目標としての事で、大なる日本を目標とせよに行動すると非難を受けることになる。長閑も此頃は色々攻撃を受ける様だが、或は此の點が缺けてゐるかも知れんと思はれる。心掛がよくて實力がありさへすれば攻撃を受けても平氣である。否攻撃など受ける心配はないのであります。そこで私の諸君に求めるものは、強健な身體と、正直な精神と、該博な智識とを以て、日本の爲に大に奮起して貰ふ事である。これがないと實に日本の將來は心配に堪へないのであります。

我等がこいつた所で、最早老いぼれてとてもだめだ。私の竹馬の友は皆死んでゐる。天下國家の御役に立たぬものは早く死んでもよいが、諸君等の様な若い青年は、大偉人の氣を養はれる事を心から希望して居る。

田中陸軍大將講演要旨

○ K 生 筆記

26

私は誠に幸福にも、今日の祝日に、諸君と共に、此の式典に列する光榮を得ました。此の際諸君に、何か一言お話を致す様にこの、校長さんの希望でありますから、聊陳べて見様と思ひます。私は當地出生の者で、又山口縣下の歴史に就ては、私は心密に、同郷の歴史上、最も光輝ある郷土に生れた光榮を有して居るのを喜んで居ります。諸君に申すのは、山口縣の者は、口を開けば、郷土の歴史を語り、それを誇りとするの狀態があります。此の事が善い事が、悪い事は別問題として、これから將來發達しようとする者は、單に過去の歴史のみを誇りとするのはいけない。未來を開拓しようとするのが必要である。未來を開拓することを心掛けずして、過去の歴史のみを誇るといふことは、これは畢竟歴史を汚すといふものであります。過去の事を語る者は、過去の人間であります。苟も未來を開拓しようとする者は、假令過去の歴史を語つても、志す所は未來でなくてはなりません。そこで此の日本の未來に就いて考へるに、日本は將來非常な困難に遭遇することでありませぬ。そこで此の日本の事を論議するは、穩かでないかも知らんが、要するに、世人はらうと思ひます。諸君の前で世界の事を論議するは、穩かでないかも知らんが、要するに、世人は日本が、五大強國の一に加り、米英の二國と手を握るのは、それだけ國際上、日本が發達して居ると云ふが、これは日本が自己の力で開拓したものでない、大戦争の結果として、獨・魯・佛・伊の諸國が、昔日の如く、力を擅にすることの出來ない狀態となつたから、日本が其の中間入をするこ

とが出來たのであります。日本に威力、富力があつて、此の勢を作り得たのではない。従つて日本は、之が爲に、非常に國民の間に、悪い結果を惹起し、精神上に及した影響は善くない。日本人は、五大強國の一に加つて、國の富力が増したといふので、其の結果、驕奢華美の風に流れて來ました。此の如く一旦習慣となつた事を、矯正することは中々困難である。そこで一般國民が、經濟狀態の不景氣に襲はれ、自ら生活の不安を啣つ様になるのである。日本程物價の高い國は世界にない。魯西亞でも、獨逸でも、佛蘭西でも、此の大戦争の損害を恢復することに努力して居る、大戦争で、物資の有らんかぎり盡したけれども、物價は日本に比較して廉である。國民の力が緊張する。緊張するから勞金が安い。材料が安い。従つて生産物が殖ゆる。外國に輸出することが出来る。これは國民自覺の結果である。日本は大戦争で何事をしたか。陸軍は青島に兵を出した。海軍は地中海に兵を出した。だが何れも大した事はなかつた。しかし平和會議では、それ等が物を云ふから、五大強國の一にも加つた。それから日本が此大戦争で得た富はどれほどであるか。戦争前は六七億圓であつた正貨が、戦争後は、二十何億圓といふ高に上つた。其が爲に、國民は一時有頂天となつた。此の結果、今日は日本の國民程華美の風に流れて居る國民はないのであります。而して其の有する金は、自ら働いて得た金ではなく、滯手で粟の摺み取りをやつたので、皆不自然に流れこんだ金である。であるからこれからこれが自然の狀態に復せんとするのである。歐羅巴諸國は、國民が擧つて努力するから、大戦争の後にも拘はらず物價が安い。日本人は其の自覺をしないから、國民に華美の風が感染した爲に、日本程物價の高い國はない。それ故、これまで日本の品が、外國に出

27

て居つたのが、口が塞がれて、日本の品物は外に出ない様になつて、輸入超過となつた。日本人はそれにもかゝはらず、とんど頓着しないで、うつちやらかして居る。譬へば、一軒の家で云ふと、一家の者が、自分の身代かどれだけあるかを思はず、衣食住に贅澤をする様なもので、長續きはせぬ。自分で働いて得た財産でなく、滯手で粟の摺み取りをしたのは、濫費が多い。國家も亦然りである。だから國民の精神を緊張させて、未來を開拓せねばならぬ。身體の健全と共に、精神の緊張を要す。然らざれば、何事も出来るものではない。先達て山口高等學校の校長と話した時、山口縣の人と、他府縣の人と比較してどちらがせうかと聞いたら、山口縣の人には、物の理解がある。學問の才がある。しかし大體に於て、緊張を缺いて軟弱であるといはれた。これを私に云ふことは遠慮して居られたが、如何にも其の通りである。それから縣知事其の他、山口縣の出身でない人に、赤裸々の話を聞くに本縣人は剛健の風に乏しいと云ふ點が皆一致して居る。精神に緊張を缺き、不眞面目は者は、墮落し易い。此の如き人は將來に大なる發展をすることは出来ぬ。自ら未來を開拓する人は、學生の時から精神の緊張を要す。兎角山口縣の人は、歴史を誇ることが癖である。何ぞ知らん、自分自身は軟弱であることを。これは國家に取つて憂ふべきことであることは、申すまでもなく、我々が郷土を愛する一人として、最も不快に感ずる所である。私どもは、山口縣の勢力を維持するのみに没頭するものではない。廣く國家に向つて力を注ぐものである。が郷土を愛する事は、やがて國家を愛する所以であります。郷土の學生が、立派にあるやうにと骨を折つて居る。私は、武學生養成所にも關係し、又防長教育會の役員である。それ故、諸君が、軍人にならう

が、文士にならうが、乃至農工商業其の他何に従事するとも、私どもには何等の差別はありませぬ。郷土の人を立派な人になし、それが國家の爲になれば善いのである、かういふ者を以て、山口縣學生諸君を注意して見るから、感じが深いのである。それ故に高等學校の校長に山口縣學生に對する批評を聞いたのである。この軟弱をば如何にして恢復すべきか。それ位の事は自分で合點せねばならぬ。私は先日行はれた山口縣體育大會で、萩の中學生が優良の成績を得た事を聞いて、誠に愉快に感じました。いふまでもなく山口縣の中心は萩である。それは國家の中心が萩であるといふ事である。君方は、私の如く萩の歴史を誇るのではない。萩の中學校の學生が體育會で成績の善かつたのは、つまり體力のよいと云ふことを意味する。やがてそれは精神の健全を意味するのである。かういふ風に行けば、未來を開拓することが十分出来るのである。山口縣の學生の軟弱と云ふ批評は、君等の力によつて十分取去る事が出来るのである。取去つて未來を開拓することが出来るのである。そういふ人々が活動するので、實力があつて五大強國の一になり、國を富ますことが出来る。日本の位置が堅固になるのである。然らざれば國が墮落する。國民が墮落する。日本の國程幸福な國はない。戦をすれば勝つ。二十七八年戰役、三十七八年戰役、今度の大戰争、日本の向ふ所は必ず成功する。所で國民の驕奢が増長する。國の幸福なる運命に逢ふても、これではいつまでも續くものではない。此の後には必ず苦勞が来るものである。人が墮落するものである。敵國外患なき時は國常に亡ぶといふ語のある如く、競争物がなければ、自分も墮落する、そこで諸君に申す。墮落することなかれ、軟弱となるなかれ、自ら運命を開拓せんと欲せば、精神をして緊張な

らしめど。幸に此式日に逢うて、諸君に一言することを得たのは、誠に欣喜の至に堪へさせぬ。他日また歸省の時は、れ目に掛つて又お話をする機会もあるであらませう。本日は之を以て終としませう。

報效抱素志
非才或致敗

籌略嘆非才
素志終不摧

吉田松陰

史料

左の一篇は、安藤先生の物せられたるものなり。今之を先生に請ひて、こゝに掲載し、以て郷土史の資料に供す。(編者識す)

梅屋七兵衛傳

梅屋七兵衛は、萩の商人にして、造酒を業とせり。本姓は山本、實名は信行といふ。梅屋はその商號なり。膽力ありて士人の間に交遊す。商業の外に、藩の御武具方の用達を勤む。家は東田町に在り。慶應元年、藩裝條銃購入の事あり。之を七兵衛に命ず。七兵衛長崎に赴き、外國商人の銃を賣るものに就きて、購買の事を商議し、小銃の見本を携へ歸り、藩の承認を受けて、再び長崎に赴く。此時藩の指揮には、小銃一千挺を買ひ、長崎より海路直に大津郡仙崎浦に回漕せしめ、現品を受け取りたる上にて、代金全額を拂渡すこととせり。七兵衛其の意を受け、購入約定金三千兩を自

ら調達し、又萬一幕吏の疑を蒙ることある時、長州人ならぬことを證明すべき書類の調製必要なりとて、伊藤春輔等と相談し、安藤の淺野家の使と稱することとし、其國より發したるが如き手形を偽造して、携へ往きたり。

七兵衛、長崎にて長藩の用達を勤むる諸藤久兵衛の家に宿し、前に商議せし外商と交渉を重ねたりけるが、其商人の言ふ所の銃價、他の外商の賣る價よりも高きを知りたる故に、七兵衛は、其所有の銃數が、所要の數に足らざるを理由として、遂にその交渉を停め、他の外商英人カールと約を結び、約定金を渡せり。是に於て、前の外商は、之を銜み、七兵衛の事を長藩奉行に密告せしかば、七兵衛は直に捕へられて、拘留せられ、奉行所にて訊問を受くるに至れり。その時七兵衛少しも騒がず、身は藤州の使者なりといひて、用意の手形を奉行に示したり。その手形左の如し。

手形

藤州安藝郡保島

梅屋七兵衛

右之者拙者存内ニ而宗門旁無紛者ニ御座候此度
商用ニ付長崎表罷越候諸々御關所無滞御勘達可
被下候以上

安藝郡

慶應元年

大庄屋

丑ノ七月

清水庄平

諸處

御關所

御役人衆中

されど奉行は、七兵衛を詰りて、汝は嘗て長藩士
楊井謙蔵に隨ひて、此地に來りしことあり。且つ
今回の宿處も、長藩の用達人の家なり。汝の長州
人なること疑ふべからずといへば、七兵衛答へ
て、御尤なる仰の如くなれど、身はもと藝州の人
にて、長州へ養子に行きたるものなり。故に長人
と漸く親しくなれり。楊井氏を伴ひしもこれが爲
なり。今や時勢急迫せる故、一應藝州の實家に歸
り居たるに、是まで長州表に、貿易のため屢々來
任せし縁により、此度藝州様より、小銃購入を命
せられ、さて長州に居たりし關係にて、長州の用

達諸藤の家に宿せるなりといふ。奉行曰く、然ら
ば是事を藝州に問ひ合せて、實否を判せんとなす、
如何。七兵衛自答として曰く、願くは急に問合せ
たまへ。長州征伐の事近日に始まらむとす。故に
藝州にては、兵器の調達に急なり。願はくは急に
問合せたまへと、奉行直に飛脚を發して、藝州に
遣り、一面には、七兵衛の應答明瞭にして、その
虚ならざるを察したるにや。諸藤久兵衛を召し
て、七兵衛を其家に監視せしむ。此時七兵衛の度
胸のすわりたるによりて、幕吏の手を脱すること
を得たるなり。もし奉行に對して、聊も氣沮み心
臆する状態あらば、事忽ち敗れん。膽略のよく危
機を支へ得ること此の如し。七兵衛は眞の奇丈夫
といふべし。
かくて七兵衛は、辛うじて、奉行の手を免れたれ
ども、暫も安居すべき時に非ずと思ひ、其夜ひろ
かに諸藤の家を脱して、外國人居留地に赴き、カ
ールの家に潜伏せしが、奉行所にては、七兵衛脱
出の事を聞き、多くの偵吏を派したるゆえ、カ
ールは己の家に隠したることの露れんことを恐れ

て、後難を慮り、七兵衛を伴ひて、上海に赴けり。
七兵衛上海に赴くや、カールは直ちに本國に歸り
て、所要の小銃を取揃へて廣し來る。その間、約
一ヶ年間は、七兵衛一人にて、上海に滞留せり、
この滞留中の事は、詳ならず。唯カールが知れる
人に頼み置きて、寓居せしめたるなるべしと後に
て言ひ傳ふるのみなり。既にして、カール來れ
ば、直に同船して回漕、目的地たる大津郡仙崎浦
に歸着せり。時に慶應二年十月の頃なりきとい
ふ。當時の船は、西洋形帆舞船なりき。
この仙崎歸着の年月は、七兵衛の後嗣にて、今の
主人なる山本友一氏の記憶によりて書けり。更に
確實なる記録によりて取り調ふべし。
仙崎浦は、豫定の歸着地なれば、大津代官もおよ
り承知せしことなれど、其の來港豫定の如くなら
ずして、久しく待ちたれども、猶歸り來らざるの
みか、何の消息もあらざる故、人皆七兵衛が生死
の程をも得知らずして、如何にやと疑憂するのみ
こゝに至りて、洋船の突然入り來るを見ては、其
地の人々誰か驚かさざらむ。皆異船襲來せりて、

代官の命令の下に、農兵數多海濱に出張して、戰
備を整ふるなど、騒動大かたならず。カールも船
上より之を望見して、唯恐るゝばかりなり。七兵
衛乃ち急に端艇に乗りて着陸し、直に大官大和に
面會して事に事の始終を陳す。こゝに始めて實情
を明にすることを得て、衆心大に安んじ、警戒を
除きて退きたり。さて大官より之を萩に報じられ
ば、萩の政府より洋學者中島治平を通辯御用とし
て、仙崎に差遣さる。
裝條銃無事に長州に到着して、こゝに英人より受
取るばかりとなりたるが、代金は萩より取り下げ
て辨することなる故に、七兵衛自ら萩に赴かむと
す。カールは是まで七兵衛を質物の如くに頼み思
ひ居たれば、今七兵衛の去るを許さず。七兵衛詳
に事情を述べれども、聽かずして曰く、必ずやむ
ことを得ずして去らむと欲せば、宜しく先づ子の
妻兒を召びて交替して去るべしと、七兵衛乃ちを
の次男友一郎の十二歳なる(今の友一氏なり)を萩
より召び寄せて、カールの手元に居らしめて、萩
に歸れり。然るに當時萩の財庫の大部は、山口に

移されたりし故、七兵衛は更に山口に赴き、金額を申出て、藏元兩人所役人近野虎之進長尾半助其他の役人一行と共に長崎に至り、役人より直接にカールに、小銃千挺代價一萬八千兩を、現品受領と同時に支拂ひたり。即ち一挺十八兩の割合なり。

七兵衛小銃購入の事により、其勤功申立證據ありて、その盡力の功を藩府より賞せられ、永代苗字を稱することを許さる。其書下文左の如し。

當町

梅屋ノ七兵衛

右御手當御入用之物之買入として追々長崎表被差越就中去丑夏裝條銃千挺御買入被仰付度之處時勢切迫付に他國入込難相成之折柄種々作略を以長崎表入込莫大之手付金自分調達せしめ手本銃取歸速に御買入相調就而は爲御國恩不容易心配遂苦勞肝要御手當向之御間を合せ抜群御用に相立候由御藏元役座より申立之趣も有之甚以神妙之至に候依之偏に各別之御僉儀を以て永代苗字被差免候事

可然と存四千挺斷然と相願候處右之一件に付候而は私取計不宜段海軍局にも廟堂より御尊有之候處別に又候梅屋を以其後千挺も被相願候事更に不相分私はとふも御國の事外よりも相分り兼入り入申候(八月七日朝と附書せり)右は慶應元年の八月の手紙なるか、更に確實に調ふべし。

七兵衛は、其後カールと親密となり、私信の往復をなし、又自ら長崎に赴きなととして、銃を買入れたること再三に止らざりき。

明治十六年三月二日七兵衛病歿す。享年六十二なり。

附記

七兵衛韻度あり。俳句を好み、佳兆と號す。その支那に赴きし時、航海中に左の句をいへり。

千鳥ばかりやまと詞や船の中

又忠正公父子復位の頃によめる句は

黒雲もちらして行きぬ冬の月

梅屋の別荘椿村にあり。七兵衛こゝに梅林を作り、茶室を構ふ。羅浮亭といふ。苑内に七兵衛自

是より七兵衛は、公然山本の姓を稱することあり。しかしこの恩典を受くるに至りしは、木戸準一郎(孝允)の推舉に頼る所多く、當局者は野村彌右衛門なり。幾もなくして七兵衛又帯刀して他國に行く事を許さる。初め七兵衛御用にて屢々九州に赴き、勤功あるに對して、澤瀉御紋付紺木綿の御羽織を賜ふ。是に至りて、苗字帯刀の許あり。商家の特榮なりしなり。

因に記す。この小銃買入に就きては、最初木戸氏は、四千挺を有することを、藩に願ひたることありしが用ゐられず。その後遂に梅屋をして千挺買入をなさしむることとなりし趣にて、左に掲ぐる木戸氏は山田宇右衛門に與へたる書翰文の一部は、微かにその消息を示せり。

昨夜春輔歸り候一時程前別紙も届き申に付梅屋千挺之條いかゞと奉察に付入御覽候間相濟候は、早々御返し可被遣候最初四千挺相願候も薩國に度々千挺づゝ相願候譯には參らぬ事に付凡入用之見込を以て四千挺相願差くりは四千挺受取候上にて於御國如何様にも仕候間

詠の句を刻せる小碑あり句左の如し。

天みつる薫りをこゝに梅の花

又その苑内にある芭蕉の句碑は、いつの頃にか志行といふ俳人の建てたるものなり。「春もやけしきとふのふ月と梅はせを」と題せり。江州粟津の義仲寺藏板なる諸國翁墳記といふ書にも、已に載せてるの圖を出し、「長門國萩鷺谷山本七兵衛梅林に有」としるせり。

七兵衛嘗て九州に赴き、熊本藩に猶甲冑を盛に用ゐるを見て、萩にては己に甲冑の不用に屬し居るを思ひ、政府に申し出で、御武具方の倉庫中に押し籠めてある甲冑を、多く熊本地方に輸送し賣拂ひたりといふ。

梅屋の東田町の自宅の奥に、一亭あり。遠帆亭といふ。近藤芳樹の亭記を作る記文別に録す。

七兵衛他國より來れる士人とも交はること多し。梅田雲濱の來りしきとも、梅屋に宿したりと云ふ。

遠帆亭記

窓のうちに住みながら遠き境を明らめ、門の関

を越えずして千里のうちを謀るは、賢し人の業なりかし。往にし年の都の戦の後、我君のみかごに盡したまふおはん真心を憎み妬みて、吾妻のくなたふれ數多の軍を興し、ひんがしより西より、かくみ攻めむとせし時、そを防ぐ火矢の器を求めしむとて、山本信行を長崎の津に遣はされ、かしてに集ひたるから船にかたせたまへるに、くなたふれの方人らいち早く探り知りて、信行を捕へむとせり。然るにその船長信行を助けて、事なく數多のうつはものを海路より持ち歸らしめけるに、頃しも風荒れ波高くて、から國の島山も間近く見ゆばかりの、遠き沖まで漂ひたりけり。その折千鳥のなく聲をききて、千鳥のみやまと詞や船の中といふ俳諧の發句をいひたりとぞ。さる危き所にてもおぢれそれず、常にたしなめる言の葉をつくり懐を遣れる心のづしやかさ。武夫とよばるゝますらをも、更に及ぶべからぬ業なりとや稱へまし。あはれ今營める此所は、いと狭き圍なれど、それすら殿島の渡殿なりし古き燈籠を求め据えあ

として、いとゆほびかに造り成したれば、こゝに閉ぢこもる程も、猶茶の湯のたぎる音にうたゝ寝の夢をさましつゝ、窓のよそ關の外の思をなすめれば、おのづから安きに居て危きを忘れぬ戒ともならざらめや
波風を鼎のうちに聞きすて、眠らん夢に寶船見よ
明治のはじめのどしの極月の節分といふ日これをしるす。

藤原芳樹

山本七兵衛信行に關する事ども、小銃買入の事を中心として、今の主人山本友一氏の談話と、その家に傳へ持てる書類とによりて書き綴りたること左の如し。藩史の大局面などより見てくひ合はぬところあらば大方の諸君子示教したまはんことを願ふのみ。

安藤紀一

文苑

東宮殿下御外遊

第五學年 上野玉市

開闢以來三千年、皇統連綿として、東洋の表に旭旗を飄せるは、之れ我が大日本帝國なり。その間の我が國の歴史を按ずるに、皇太子の位にして、率先身を以て外國の制度・文物を取入れて、國運の進展に貢獻し給ひしは、聖德太子なり。然れども、太子親ら外國に渡らせ給ひしにはあらず。親ら海外を御巡遊になりしは、東宮裕仁親王殿下を以て嚆矢となす。實に、肇國以來の傳統を破りたる、歴史上特別頁を作られたるなり。

申すも畏き極なれど、殿下は資性英邁にましまし、令聞遠く中外に布き給ふに、尙廣く智識を世界に求めんことを期し給ひ、御父陛下の聖旨を銜み、大正十年三月三日、東京御發興、驛程萬里御渡歐の途に上らせ給ひ、歐洲各國を御巡遊あらせ

られ、英・佛・白・蘭・伊の諸友邦の元首と、親しく御交驩の誼を重ね給ふ。而して、その間具さに見學を廣めさせ給ひ、氣候風土の變化にも、些の御障りもなく、御豫定通り、九月三日を以て、無事御歸朝遊されたり。
抑も、東宮殿下の御外遊は、他日陛下として、萬機を御親裁あらせらるゝに必要のため、西歐の文物・制度・風俗を御見學遊ばさるゝが、主たる御目的なりしなり。然れども、殿下の御聰明に渡らせらるゝと、御性格の崇高とは、御巡遊の各國に、未曾有の好感を興へられ、國交上にも、多大の御貢獻遊ばせられたり。又御不自由なる艦内生活に御満足遊ばせられ、金枝玉葉の御身を以て、御游泳・相撲の運動を試みさせ給ひ、爲めに乗員は、自ら顧み、優柔の起居に陥り易き傾向あるに慚愧報顔し、艦隊の士氣大いに振起したりと。其の他、百二十度を超ゆる航海中、親しく機關室に臨ませられ、兵員の勞苦に深甚なる御同情を垂れ給ふ等我等臣民の感激に堪へざる所、枚擧に遑あらず。惟ふに、歐洲大戰終りを告げてより日尙淺く、

且又英國にては、國內大いに亂れたる時なりければ、時としては、意外の危険あらんも計られじ。かゝる中の御巡遊なれば、我等は國を擧げて、殿下の御安泰を御祈り申し上げたるあり。今や玉體恙なく、愛でたく御歸朝遊ばせらたり。我等臣民の喜悅、何ものか之に如かん。國民たる者、益々一致協力して、建國の鴻謨を翼賛し。天壤無窮の皇運を扶翼し奉り。皇恩の萬一に報せざる可からず。

地理上より觀たる萩町の將來

第五學年 神田 壽治

地方都市發展の要素は、第一位置、第二背景、第三地方人士の意氣なり。我國に於ける急速に發展しつつある都市、例へば、名古屋神戸等を見るに、名古屋は東西交通の要衝を占め、濃美平野を有す。神戸は良港を控へ、大阪京都の咽喉として發達し、共に市民の活氣潑刺たるを視る。今予は叙述上の三要素に就き、萩町を主題として試に之を論

り、夙に鐵道の敷設に運動し、築港の計畫に盡瘁しつつありと。果して此の如くなれば、其の實現も近き將來にあるべく、一旦交通機關にして完成せんか。武陵桃源は、忽ち化して熱鬧市場とならん。要するに、地理上より觀たる萩は、交通機關の完成を俟ちて、大に發展する將來を有するといふべし。今や峠内町村合併して、大萩を出現せしめんとする議ありと聞く。これ自然の趨勢にして、時機に適したる舉と云ふべし。予輩は交通機關の發達と共に、一日も早く此事の實現せんことを、萩町將來の爲切望して止まざるなり。

青年の覺悟

第四學年 額野 孝夫

自重せよ。社會を改造せよ。道徳心を養へ。商業的道徳心を養へ。此等は、我が國民、特に現代の青年の覺悟としなければならぬ事である。干戈の大戦は、既に終つた。併し、それと同時に、吾

せん。

一位置 萩町は西部裏日本の要津にして、對鮮對西の絶好の位置を占有せり。港灣も比較的良好なる素地を有する事は、先年第二艦隊の來航せる時の話題となれり。聞く嘗て山縣伊三郎氏の朝鮮政務總官たりし時、元山と萩とを聯絡せんとする計畫ありしかどか。されば當然元山間島、浦鹽等の港津と聯絡を取り、中繼港として發達すべき可能性を有するものと思惟す。

二背景 萩町を方圍せる三方の連山は、甚しく他の交通を阻害して、商業上に取りては極めて劣悪なる背景なり。萩を桃源化し、萩を萎微せしめし原因は、蓋し之が爲ならん。然れども、此の缺陷は、交通機關の發展によりて、容易に補ふことを得べきなり。

三地方人士の意氣 交通機關の發達は、自然的のものにあらずして、人事に属す。而して此事たる政府當局の施設に係るも、亦地方人士の奮起の、大に與つて力あることを忘るべからず。聞く處によれば賢明なる萩地方人士は、大に茲に見る處あ

々日本國民の見逃されぬ二つの事が起つた。一は我國の向上發展の前面の一大暗礁の表出、即ち排日問題がこれである。他は、種々な思想の輸入の結果、社會改造の聲の起つたことである。排日問題は、確に今次大戦の結果、我國の國際的位置が頗る高まり、列強の一に加つたといふ事が、その主なる原因の一であると思ふ。蓋し、他の國から見ると、どうしても、我國は、成金國と思はれるに相違ないが是は個人間に於けると同様、勢他の嫉妬や反感を招かすには居られないので致方がない。又、戰爭中は、歐洲の聯合國、皆、戰爭は涉々しく往かず、食料には缺乏するし、大切な良人や子供を失つて、殆ど一般の國民は、喪服を着けて居ると云ふやうな、悲惨な運命に苦しんで居るに、獨り我國だけは聯合國の一でありながら成金なごが出来て、飲めや歌へやの大騒ぎをやり他處の不幸を平氣で見て居ると云ふやうな、不人情極まる態度の有様のあるを痛く憤慨し、是れで武士道の國とか、君子國とか、よく言へたものだ立派な火事場盜賊ぢやないかと口にこそせぬ、腹

ではさう思つて居たのであらう。是れは、確に排日の氣運を助長した一因と見るべきである。彼の濠洲などに於ては、やはり戰爭中、我國の奸商等が、一攫千金の利を得ようとして、やくざものを多く賣り附けたり、又他の商標などをまかしたりした爲、日本人に對する彼等の信用が地に墜ちて同時に排日的思想が一層熾になつたのである。故に余は斯う言ひたい、排日熱の世界に蔓延したのには、必ずしも一部の米國人や、支那人の、人望を得んがために、吹聴した爲であるとはかりは言へない。即ち我國民に道徳心、特に商業的道徳心の缺乏と、自覺自重心の無いが爲である。さて、又社會改造の聲は、或ひはこれを一概に危險思想だと思ふ人もあるが、實際、我國に取つては、甚必要の事である。政界の衰微や、官私諸會社の不始末や、あらゆる方面に於ける無責任の言動は、一として社會改造の氣勢を刺戟しないものはない。日本の今日ある所以の源たる明治維新、その又源たる吉田松陰先生、及びその子弟等維新前後の大改革に貢献した人々は、當時徳川氏に取つて

は、非常なる危險思想の持主であつたに違ひない。けれども、實際はそれらの人々が、當時に必要であつたのである。故に我々は祖國の國體を害せない限り、大に社會の改造を圖り、この社會を公平なる秩序的なる面白き社會としなければならぬ。これ又、前の自重心、商業的道徳心と共に、第二國民の缺くべからざる覺悟である。嗚呼、吾々の責任は至大である。我々は、今までの青年のしななければならぬと覺悟した事以上にせねばならぬ事が増加したわけであることを忘れてはならぬ。

菜根を咬め

第四學年 山田 清華

一日の勞を終へて歸宅する農夫の食事の有様を見よ。麥食の山盛のみ。菜根の漬物のみ。しかるに彼何ぞ之を喜ぶことの深く、食するの多きや。山海の珍味は、席上狭しと滿て列ね、金銀の器皿は燦としてかがやく彼の富家の食事を見よ。

之を彼の農夫に比すれば、實に百倍千倍の喜びあるべけれど、彼の富人の心、果してその喜あるべきか。否々、彼は、なほ是より以上の美味を欲して已まざるなり。嗚呼、一片の菜根は、なほ山海の珍味に勝る。其の然らしむる秘訣はいづこに存するか。曰く、勞苦是なり。實に勞苦後の菜根の味こそ、山海の珍味に勝るものなれ。食事に不平を囑す者は、勤勞の足らざる人なり。怠惰の人なり。その身の將來は、奢侈の風を以て、幸福の天を、不幸の雲に曇らすべし。菜根を咬みて之を味ひ得る者は、能く勤勞する人なり。眞の人なり。平和の神のまねくがまゝに進み行かる人なり。あゝ、人よ菜根を咬め、菜根を咬め、菜根を咬め、萬斛の美味を味ひ得る人となれ。

峠の夏

第三學年 田原 節夫

友は平素の歩調でゴロゴロ坂を登つて行く。それ

に劣らじと思ひながらも、今朝から十里の道を突破して、今又この二里の坂道に疲れ切つた自分は、已に玉なす汗を拭ふ勇氣も出ない。蔭の少ない山峽は、ろよ吹く風もない蒸し暑さ、蟬の聲が身體に喰ひ込む様だ。友も無言。自分も無言。友の足跡を踏んで行く自分の胸の中には、何時の間にか友に對して、或種の不平と、嫉妬とをさへ感ずるに至つた。何故俺はこんな坂道に弱いのだらう。一體何處まで登つたら峠なのだ。いつぞ此處で死んだ眞似して、友の周章てる様を見て笑つてやらうか。なぞと考へながらも、また暫く續いて行く。「もう五町。日が暮れるぞ。」木蔭から再び明るい所へ出ると、長いサイレンスを破つて、友がかう叫んだ。此處で少し休息して行かうと、提議しようとした自分は、例の負け惜みと、かねて聞いてゐるこの峠の或る傳説の爲め、日が暮れてはといふ氣味悪さが混合して、ぐつと差し止めて了つた。少し元氣を恢復したらしい。足が軽くなつたエツチオツチと自暴的に、殆ど無意識に登つて行

く。峠の松の木が次第に大きくなつて来る。ここだ。自分は駈け上つて、荷物を置くや否や、道側に湧き出る清水を口づけに飲んだ。意識が次第に明瞭になつて、身體が蘇つて来る。今迄の事がまるで夢の様だ。

自分は今から下りて行く故郷の方を見やつた。村の白壁に夕日が赤赤と照りつけて、平和の光が満ち満ちてゐる。鯛が頭上で啼く。「もう一息だ。」友を顧みて微笑んだ自分の心には、何の蟠りもなかつた。

亡友を懷ふ

第三學年 吉村繁茂

あゝ。歡樂の夢も醒めては只一瞬の幻。なまじ君見ずば、余行かずば、否君と親友ならざりせば、今日此の嘆きはすまじきものを。實にや人生は涙ぞかし。

空薄霞み雲雀鳴く春の野や、共に手に手を捉りて紫雲英・蒲公英摘み、胡蝶・蜜蜂追ひ廻しし昔の有

の如くならざれば、唯々聲を限りに助を呼ぶのみ。四邊を見れば嬉しや十四五人の人々十間計りの所にて釣するあり。兩人してそれに一縷の望を繋ぎて、助を連呼すれども残念なるかな。風にまぎれて顧みられず。君は苦しげに水を攪き居たりしも間もなく姿失せぬ。されども未だ救の船は至らず。吾亦危からんとす。ああ。此の間の余の思記さん言葉もなし。やがて來れる船に引き上げられたれど、君は應急の手當も功なくして、遂に空しく逝きぬ。

嗚呼如何なれば、惡魔は此の親友を襲ひしぞ。現世は春夢の如く人命は朝露の如しとはいへ、美しく咲ける君が心の花をあへなく散らしし惡魔を惡き。何れ終はありと云へども、僅に十七歳を一期として幽明界を異にせんとは誰か思ひかけたりし嗚呼。無情なるかな。天何の怨ありて前途有望なる青年を見捨しか。地や何の恨ありてわたら若木を枯死せしめしか。風や、何を怒りて花の蕾を吹きまぎしぞ。天云はず、地答へず。風告げざれど、我胸に残れる君が面影。あゝ如何で之を忘れ

様、思ひ出すも胸ふさがりて、我心は亂れに亂る。忘れもやらず、七月の十八日。山も木も燒き盡さんとするが如き炎暑。試験も終りて放たれし小雀の如き感じする放課後、余と君とは半日の清

遊を阿武下流に約しぬ。晝食を終へて暫くする程に君來る。オーと答へて互に雑談に耽りつゝ、學校に行き、宿直の先生に校艇の拜借を願ひ、直ちに河岸端よりただ二人金剛を本流に漕ぎ出す。川面には小波あり。裸になりて勇を鼓し、整櫓すれば、忽ちに、常磐島も過ぎて、西の濱へ着きぬ。

地風なれば海面は比較的靜穩なり。乃ち十間計りなる洲指して胸けごなる水の中を渉る。余は彼方此方を泳ぎ廻れど、君は水泳に拙なればとて洲にて游べり。かくする中今迄氣付かざりし水流は引潮に伴ひて俄にすさまじく、風さへ加はりて余等を沖へ沖へと押し流さんどす。此時不意に君は三間計り押し流されたり。狼狽せしならん。「どこか、どこか。」「こつち、こつち。」と呼ぶ中に、間もなく君が助けを呼ぶ聲余の耳を劈きぬ。助けん。行かん。と欲するに、此時自分も既に進退意

得んや。

己は己にして己に非ず

第二學年 横山幸生

己は己にして己に非ず。己は國家社會に於ける身にして、個人としての身にあらす。換言すれば、我が身は、國家社會に貢献すべき身にして、己一個人の爲の身に非ず。故に、己が身は國家社會に貢献すべく、父母より受けたるものなり。先帝陛下の下し給へる勅語の御趣旨によれば、我等は、その祖先より傳へたる國粹を保存し、且之をその子孫に傳へざるべからず。即ち我が身は、亦、國粹を保存し、且之を子孫に傳ふべき重大なる身なり。是專ら、國家の爲に、己が重大なるにて、己一個人の爲に、重大なるに非ず。己にとりては、我が身は鴻毛に比すべきあり。されば、我等は國家社會を中心として努力すべく、己を中心とすべからず。かかれは利己主義の如き偏屈なる、思想の起る理由あり。然らば、我等は如何にして、國

家社會に、貢獻せんと欲するか、他なし、己の才の適するところを度りて、職に就くのみ。或は農夫として、或は職工として、或は官吏として、又或は、學者として、何れも、社會國家人類の爲ならざるはなし。繰返して云ふ、己は己にして己に非ずと。忠君も、愛國も、將又、人道も、之より出でざるものなし。我等日本國民は、陛下を中心として奮勵し、以て君恩の万一に報せざるべからず。

九月三日の朝

第二學年 山本 馨

早起冷水浴後、机の上で頰杖をついて居ると、糖漿で母がかかしな雲の出で居ると云はれる。出て見ると、なる程波の花の様に、上が真白で下が真黒な雲が、刷毛で塗つた様に横に長く連つて居る。そこへ兄も出て、来てあれが雷雲とか云ふのだとの説明に感心して見て居ると、ヒカツと光るや否や天地もさける様な音がした。不意だつたも

のだから僕は飛び上つた。隣からアツと云ふ聲の聞ゆる直ぐ後から、ハ、ハ、ハ、と云ふ笑聲が聞える。魂消たあまりに笑つたのだらう。

やがて清風が一陣二陣と吹いて来て大粒の雨が「ザー」と降つて来た。おかげで目出度い今日の日もお天氣は目茶苦茶になつた。

然し世間の人、特に農家の者は早魘で心配して居る際、半歳の間、日夜、御丈夫で御歸朝遊ばすようにと祈つて居た所の萬里御外遊の東宮殿下が、而かも今日御機嫌麗しく御歸朝御入京、市民奉迎奉祝の目出度い日、萩の天候は目茶苦茶になりはしたが、今日の雨で皆心配がとけた。東宮殿下も御勇ましく御歸朝相なつた。今まで心配して居た人々は皆安堵した。丁度今日の雨が土地が潤つた様に。そして人々は雨が降つたから作物がよく出来ること云ふ希望のある如くに、帝國の將來を思ひつゝ東宮殿下をお迎するであらうと思ふと、雨が降つて一層この日が目出度様な感がある。

菊ヶ濱の夕暮

第一學年 大島 政 輔

秋の初めの冷味を帯びた風がスウーと吹いて、夕飯の支度をしてゐる家々から出る煙を長く靡かせてゐます。私は夕暮の景色を見んものと、菊ヶ濱邊に歩を運びました。

近くには、はや子供の群も見えず、波のみが大海を我もの顔に願いでゐます。漁舟は三四艘港をさして歸つて來ます。

遠くに見ゆる相島を始め、散在せる六つの島、及び鬱蒼としてゐる指月山に、淡き雷が懸つて、總てが夕暮を説明してゐるものやうであります。夕日は今鯖島の上を輝いてゐます。何とも名状しがたい美しい色をした雲が、指月山の森に映じてゐます。その中に邊りは刻々に淡黒くなつて行きます。病院の所の青松にも夕暮の霧が懸つて、黒色を帯びてゐます。目を轉じて北方を見れば、笠山は遠く、淡く、海上に横はつてゐます。鶴江の沖に五六艘の漁舟が、何かを釣ると見えて時々竿

の上るのが見えます。不圖夕日に目を向けて見れば、夕日は、はや、鯖島に没して、紅黄色の雲が纒に名残りを止めてゐます。

大空を見れば、天の川かと思はれるやうな長い雲が幾つも並んで、其先には團子を重ねたやうな雲があります。雲の色は刻々に變つて、今まで紅黄色であつたのが、次第に黒色を帯びて、凄い有様になつて來ました。今まで鶴江の松で夕暮を報じてゐた鳥は、いつ間にか姿を没して、其の形を見ることが出來ませぬ。

北方は青黒く、西方は紅黄色をした雲と海が、何處が境ともわからぬ様になつて連つてゐます。突然夕暮の静けさを破つて、遠くで喇叭の音が響いて來ました。いつの間にか電燈が點いて、人々の笑ひ興ずる聲が風に送られてかすかに聞えて來ます。風の方向も變つて、今迄海上より來てゐた風はなくなり、陸上より吹いて來ます。淡く見えて居た指月山は眞黒くなつて居ました。今まで光を失うて居た半月は、にはかに輝き始めて、邊りは全く夜の光景を現しました。

秋ご鍛錬

第一學年 大和忠雄

朝夕涼しさが身にしみ、昨日まで囀いて居た蟬の聲も全く聞えなくなつて、秋を知らせる蟲の聲が繁くなつた。一年も最早半ば過ぎて、何だか淋しい様な心持がする。しかし、我々はこの秋に對し、期待する所がある。それは何か。我々は暑中に於て、大に規律的に心身の鍛錬を圖つた積ではあるが、尙休暇であるが爲に、一つは暑さの爲に多少惰弱となつたことは免れない。そこで秋は心身の引締る時であり、運動の好時節であり、勉強

の好時季であるから、我々はこの好時季を無益に過さず、最も有意義に暮したいと思ふからである。天氣晴朗な日には、野外に出て、麗な日光を浴び新鮮な空氣を呼吸し、大に運動して體力氣力を鍛へよう。風が冷かな朝夕には、書を読み、文を學んで、大に磨き心を養はう。秋は實に心身鍛錬の好季節である。秋は凡ての植物が實を結ぶ様に、我々も良い結果を得ねばならぬ。然らざれば一年間總てを無意味に過したことになるであらう。

輕肥非所願

一身付天地

垢汗亦何患

萬事都等閑

吉田松陰

詞林

日の皇子の出でましを祝ひて

特別會員 中津江延彦

春日うららに豊榮昇るこの朝け皇子の御艦は出で立たすらし。
波の穂にあきつ島が根いかくりて皇子の御艦はもだ走るらむ。
みごりの海白ゆう花の散る中をを鐵の御艦分けつゝ行くらむ。(以上三首)
潮さるに岩群鳴りて鳴る神の吼ゆるに似たりをはわだのはら。
大岩や小岩の端ゆうしは湧き渦巻き碎けかもめ飛ぶ見ゆ。
わたつみの果しみ空に消え入りて心さびしくひとり物思ふ。(海に對ひて)
現そ身にやる枉つ日の忍びきて空しく瘠せし秋の夕暮
庭つ鳥の聲も期に朝つく日たゞさす中に居れば嬉

しも。
朝つく日茜さし刺すひびがしの空をし仰ふげは心さやけし。(病床吟)

藻鹽草

特別會員 金子乙助

藻鹽やく烟も添ひて濱松の梢のごかに立つ霞かな
牛に乗る童の笛も聞ゆなりすすな花さく野路の夕暮
暮夏の日の暑も知らぬしら榎の青葉涼しき森の下蔭
蔭降る光る鳴るを、めきの静々今や晴れ行く夕立の空
散り初めし桐の一片に此夕秋を知りても宿る露哉
哉としねかる田面の里の朝夕に賑添へて立つ烟かな
四方山の話の花も咲き出て、長閑けかりけりスト
トーアのもと
天を、るポアラの梢冬枯れて吹く風寒し學びやの庭
塵の世を離れ小島の岩が根に操高くも立てる松哉
見ぬはごに友はいたくも老いにけり我をも人はさこそ見るらめ

YOUNG JAPAN'S MISSION

Hisaharu Koda, 5 : A.

The world is now in course of reconstruction. The sweeping tendency has been accelerated by the great European War, which has thrown the whole world into disorders, and all the Powers in Europe are greatly suffering from the economic exhaustion caused by the War, the labour troubles, and dangerous thoughts tending to undermine the national foundation.

Sea-girt and separated as we are, our Empire can not stand aloof from the general trend of the world. Those difficulties which are experienced by the Westamers are gradually taking root in this soil of ours, though they are not so marked here as in Europe.

Upon the termination of the War, our country found herself one of the five great Powers of the world—an undisputable proof of the enhancement of our national prestige. At the same time the western countries have begun to turn their attention to the Pacific and the Far Eastern questions. While Japan is busy solving the standing problems regarding the withdrawal from Siberia, the retrocession of Shantung, and the mandate of Yap Island, President Harding, of the United States, has proposed to hold the Pacific Conference. It has been a great shock to our Government and people, in consideration that the issues of the conference will greatly affect our national interests, the counter-measures to be taken have been much discussed among ourselves. Some are of opinion that the proposed conference will be nothing but "great cry but little wool", while others declare that our national crisis has come, and we must be prepared for the worst. Time will see which is in the

right. At any rate we must endeavour to seize this opportunity to make our fair attitude clearly understood by other nations, for our victory in the Russo-Japanese War has caused this country to be misunderstood as a war-like people, and consequently as a menace to the peace and welfare of the world. On the contrary we are second to none in advocating the cause of peace and justice. Our history gives ample proof of the fact. It is true we have taken up arms against Korea, China, and Russia, but it was nothing but the response to the call of justice and humanity. The removal of the existing misunderstanding and the arrival at an eventual agreement with regard to the general principles which will ensure friendship and good mutual understanding between the nations are rested upon our shoulders.

In point of our trade with foreign countries, it is a matter of great regret that the amount of imports is much larger than that of exports. Of

course it is largely due to the worldly business depression, but partially to the Japanese businessmen's inactivity. We have much to learn from Germany. She is now fast recovering from the disastrous effects of the great War and her recent industrial development is marvellous. We, as the peaceful nation, must exert ourselves to the utmost to win the war in peace. Now, what is the present condition of our country in the world politics? Japan of to-day is, so to speak, a lost child in the Pacific Ocean. Our country, as the leader of the Asiatic peoples, should hold together the yellow race in the Far East, and must set up against the pressure of the white. If not, the white would push us to the same fate as the niggers. There is no reason that we should put up with the oppression of the white because our blood and colour are different from them. Sir up! young men of the Land of the Rising

Sun ! Hark to the thrill call of great tasks and heavy responsibilities in store for you !

A TRIP TO OMI JIMA

Tamaichi Ueno, 5 : B.

It was on the 26th of July of this year that I made up my mind to take a long walk to Omijima availing myself of the summer vacation.

At last came the long-awaited-for day. Early on the morning of August 7th, our party consisting of four friends of mine and me, left for Omijima in a fishing-boat. the weather was so fine that the whole sky was clear without a speck of cloud, and the sea was very calm.

It was not long before the boat got there, covering a distance of about five nautical miles. Of course this was my first visit there. A lot of huge rugged rocks towered above us. "O, look at

big pine tree.

Thus a few hours were passed joyfully. It was a great tug for us all to take leave of the place. But night was coming on, so we had to go back to the fishing-boat. When we arrived at our village, it was so dark that we had to grope our way home.

Indeed the island is worthy of its fame for beautiful scenery, but it is a matter of regret that it being not easy of access, visitors there are very few in number.

"DAWNING SPIRIT"

Katsuzo Fujii, 4 : A.

He who desires to lead a happy life must be prepared to spend a happy day. And he who wants to spend a day pleasantly must wake up with a good plan in the morning. He should not

these wonderful rocks!" I cried. I have never seen uglier-looking rocks than those presented before our eyes. Waves dashing against the rocks and the birds singing in the neighbouring mountains--- the impressiveness of all these was beyond description.

Then we disembarked on a sandy shore. No sooner had we landed there, than we began to climb Mt. Omni. It was 11 o'clock when we reached the summit. We sat there for a moment, and enjoyed the panoramic view of the surrounding districts, rolling out like a large map beneath us. Within a short distance, we could see our village. Away in the distant haze we saw two vessels steaming for the harbour. I felt as if we were in some fairy land.

Then we descended the mountain and took a meal. In the afternoon Mr. K began to fish and the others were swimming, while I enjoyed quiet reading laying myself down on the sand under a

turn out of bed without the resolution, "Now, it is the threshold of success", and without as bright a prospect as the sunshine. We call this "Dawning Spirit". So for every one it would be better to say "Good morning" to all his family, his friends, and whomever he meets, for whoever the companion may be, he needs to give him a favourable impression. He should greet any one with sweet smile so that his circle may ever be filled with happy faces. It will go a long way towards influencing not only himself but also others and all things he is concerned.

In short there is no doubt that while dejection brings with it failures, cheerfulness is always accompanied by success.

THE OLD POSTMAN

Hideo Kihara, 4 : B.

It was on a hot day last summer that the

following incident happened; the scene, Higashid-amachi, the most bustling street in Hagi.

The sun in the afternoon was shining so bright and strong that the foot-passengers were all in a muck of sweat and of course I was among the rest.

I was walking in the shade. An old postman who looked well and happy for his age, hanging-down a little bag under his arm plodded along toward me and when he approached me he stopped and looked me in the face. There was no doubt that my face at that time were an incredulous look. "Look out!" suddenly he cried out, "Aren't you a student? Then mind what you are about!"

Mercy on me! I had been walking along the right side of the road, and it was I, a student, that was given advice, and it was he, an old postman, that gave it!

Again he shouted at the top of his voice. "Can't you read that notice?" Pointing a telephone

pole, which had a bill boldly written "Keep to the Left."

People there turned thier gaze upon me. Hanging down my head in shame, I rushed into a by-road. To speak the truth, at that moment I was quite beside myself with shame.

Even now the more I think of it, the more convinced I am that I was wrong, and it makes me feel most acutely the significance of those words "Aren't you a student?"

This little event ran to the bottom of my heart so deeply that I can never walk in the street but it comes upon me. Thus my bad habit was quite removed and permanent good effected by the old man. I must thank him and cannot be too grateful for his kind advice.

After that I often find the old postman walk along the left side of the streets, well and happy, hanging the little bag under his arm. Then I pray in heart for him, "Bless on him and he be well

and happy forever!"

SERVED ME RIGHT

Toshinobu Oka, 4: C.

One fine day during the summer vacation I went fishing with a friend of mine to the stream of Oi, which runs through our native village. It was as cool and agreeable as in spring, and the weather was ideal for fishing. Hours passed by. We ate our lunch on th bank, watching our loats bobbing up and down on the water. By sunset we had a lot of fish to our great satisfaction. Specially I made a good catch. To return home in high spirits, I tried to draw my basket out of the water, where it had been dipped. But alas! the rope broke and the basket drifted away. In an instant I spring into the stream and succeeded in regaining it, but all the fish had run out and I

was wet to the skin. Much disappointed, I started for home. On the way I was met by my mother who reminded me that the day was "Urabon". Now, "Urabon", according to the Buddhism, is the festival of the head, during which all killing is forbidden. My ill-luck on that day, I thought, served me right.



修學旅行記

第一日 第四學年 山本 赴夫

萩町より大分市まで

五月一日 牛雨半晴

我等第四學年生は、今日より四泊五日の豫定を以て、大分方面へ修學旅行をなす。午前第一時までに、金谷天神社時に召集せよとの豫令の下に、一同用意萬端遺漏なく、定刻までに全く集合し、金子古川兩先生の引率にて、山口町に向つて出發す。此日黒雲空を被ひ、星一つだに見えず。闇黒の道路を三組に分れ、數個の提灯を便に進みぬ。明木村に到る此より雨降り出し、歩行の困難一方ならず、加ふるに道中最難所たる一升谷あれ共、一行の元氣愈旺盛にして、一人の弱者を見ず、踏破す千山万岳の烟など打ち吟じつつ進みぬ。急激なる傾斜をなせる坂を上るときの加き、頗は熱し、汗は流れて堪へ難けれど、頂上に達したるときの愉快は又格別なり。かくて此の峠を越ゆるや、平坦なる大道に出で、猶も進む程に、夜の暮は切つて暮されたり。雨小降りとなる頃、我等は既に佐々並村にさしてかゝる。暗黒より出でし我等の眼に映じたる此の村は、洋畫によく見るスイスの山水を思はしめぬ。それより松並木ある街道を過ぎ、七時半と云ふに一の阪の麓に着きぬ

此處にて朝食を喫し、暫時休憩の後出發す。程なく頂上に達す。と見れば山口町は鳥瞰的に眼下にあり。其の壯快筆舌のよく盡す所にあらず。一行狂氣して、歩行の疲勞をも今は全く打忘れたるが如く、元氣愈盛に、さしもの急坂をも一氣にかけ下り、九時三十分には山口驛吉賀運送店に到着するを得たり。此處にて旅裝を整へ、先發の山本黒川兩先生と一緒となり、十時二十分發の汽車に乗りて小郡に向ふ。十一時十分小郡着。直に下關行列車に乗換へて發す。數多の驛を過ぎ、緑の野を走り、岩石突兀たる山間を通過し、ごつしか長府近くの海岸に到りぬ。海波濤にして眞帆片帆の往來するあり。神話に名ある干球滿珠の浮び出づるあり。其の景に恍惚たりし我等は、やがて午後二時四十分といふに下關驛に下車し、三時四十分發の連絡船に移る。機關の響と海風の涼しさとに、眼より覺されし思はし心地よし。間もなく汽笛一聲海面に響き渡り門司に向つて出發す。海上を眺むれば、大小の汽船無數に輻輳し、商況繁盛を極む。しかしながら惜むべきは此の市背後に山あり、且海底やや淺きは日本の關門として、地形上不利の點尠からずと思ふ。汽船は時折異様な機關の振動を起し二十分を經過せる後門司橋樑に着す。我等一同は直に驛前にて自由散歩を許され、三三伍伍市内を見學せり。商家軒を聯ね、市況極めて殷盛なり。四時三十分大分市の列車に乗る。車窓近く大里の麥酒會社、淺野セメント會社等表れたり。此の地工業の盛大なるは既に學びたる所、今其の一部を車窓近く瞥見し、驚異の眼を張らざるを得ざりき。程なく汽車は方向一轉して、英彦山脈の東

面に突進し、黒煙濛々たる大空は、靜寂なる青天と變じ、綠野は一面に展開せらる。霜田驛行橋驛など、十餘の驛を過ぎ、湯の町別府に着きたる頃は、夕靄一面に立籠めたるが、處處にイルミ子イシヨンの美觀あり。旅に疲勞せし眼も醒むるばかりに眺められたり。七時十分目的地大分驛に着きぬ。我等愈長途旅行の第一日を終り、狂喜して下車すれば、九州沖繩共進會の白色門は、停車場前に電飾せられ、眞向には會場の夜景燦然として輝き、眼に映するもの一として我等の心を躍らしめざるものなし。八時協賛會指定の合宿所に投じ、十時就寢す。

第二日 第四學年 岡 智教

共進會觀覽……地獄巡

五月二日 晴

今日は我が旅行團の主目的たる共進會觀覽の日なり。一同夙に起き出で、食事もそこそこにして宿所を立ち出づ。途中既に大小參差幾旋の旗の朝風に翩翩たるを見る。會場に到れば其の規模の壯麗なる眞に驚歎に堪へたり。之を第一會場となす。直に先生に導かれて場に入る。先づ農業林業機械工業の諸館を巡る。出品何れも精巧善真なり。講堂館には、吾人の記憶猶新なる尼澤博劇當時の寫眞特を目を引けり。又祭禮館に於ては、南洋臺灣方面の歴史地理的材料、殆ど遺憾なく網羅せられ、宛然彼地に遊ぶの感ありき。それより朝鮮館に入りて彼地の事情を察し、美術館に入りて名畫の多きに一驚を喫したり。殊に場内には九州水力電氣株式會

社の施設にかかる發電所の模型あり。大山を築きて五本の鐵管を布設し、眞の發電所を見るの感ありき。午後零時集合、午食を喫し暫時休息の後、第二會場に向ふ。會場は懸崖を以て之に充つ。ここは大友氏の城址にして、老松矗立して天を摩し、壑深深く藍碧を湛ふ。一同場内に入りて順次觀覽す。多くは統計的の者にして、我等の留意するに足るもの比較的に尠かりしは遺憾なりき。到底其の規模第一先會場に比ぶ可もあらず。唯や目を引きしは人物彫刻の未成品なり。聞く所によればこれ某氏刻意の作、將に成らんとして不幸にして病を得、遂に木像を抱き怨を呑んで黄泉に赴けりと。死而後己の言を想起して、感慨うた深かりき。時正に一時を報す。乃ち此處を辭して停車場に到り、一時三十分發の列車に投じて亀川に向ふ。三時亀川着。地獄巡をなすべくここより下車す。一同の意氣大に昂進す。羊腸を辿ること數丁。道傍既に溝水より蒸氣の立つを見る。一同愕然たり。程なく血の池地獄に達す。池は直徑十數間、赤色の熱湯沸々として湧出す。蓋し池底に赤色の粘土あり。故に温泉赤色を帯ぶるなるべし。一同好奇の眼を見張りてしばし茫然たり。已にして或は手を差入れて溫度を試むるものあり。或は手巾を浸して赤色に染むるあり。與未だ盡きざれども時刻に限あり。一同先生に促れて此を出で、海地獄に向ふ。其の間里餘。山路崎嶇、歩行頗る艱む。漸くにして達す。之を血の池地獄に比するに其の廣に於て數倍せり。色藍碧にして深を知らず。海地獄の名眞に空しからずと云ふべし。加ふるに古松老杉地邊を巡りて鬱蒼たり。景に於ても亦佳ならざるにあらず。其の溫度の如きは、鵜卵を五分間にして熟煮せしむるに足

ると云ふ。以て其の強度を察すべし。猶他にも其某の地獄あれども、時既に夕景に迫れば、愛を割きて別府に向ふ。其の間二里餘峰巒倒繞して見るべきものなし。隊伍をなして市中に入りたる時は、電燈映々として街路を照す頃なりき。不老泉の前なる旅館に投ず。一同飽くまで温泉に浴し、晚餐後暫後散步す。午後十時より摩訶の園に遊ぶ。

第三日 第四學年 領野孝夫 竹内忠雄

舊耶馬溪……新耶馬溪

五月三日 晴

午前六時半旅宿を出で、一同停車場に到る。直に中津行の汽車に投ず。既にして發車。地獄の煙を横に眺め、程なく龜川に着す。それより杵築、立石、宇佐、四日市等を擧て中津に達す。此の時八時過なり。ここにて我等一同は愈耶馬溪の輕便鐵道に乗換ふ。忽ち汽車は林に入り、轟々たる音を反響せしめつつ進む。今汽車は林より出でて河畔を走れるなり。程なく船返りの瀨あり。これより耶馬溪の奇勝漸く其の美を現はす。既にして左に昔の洞門を眺む。苔蒸したる懸壁の下、松樹倒生する危巖の邊、人馬洞門を出入する光景宛然一幅の活畫を見るが如し。尙進めば、溪山の美容愈加り、山陽の所謂一曲は一曲より奇なるの句實に我を欺かず。山、水を望め、水石に迫り、奇巖峭壁迅流激湍、縦横に紆曲し、山形岩容變幻奇異名狀すべからず。賢女塚停立櫻草塚等の高く聳ゆるを仰ぎ口の林を望み、鐵橋を渡れば直に柿坂なり。此に

りし頃は午後八時過なりき。柿坂より深瀬橋に到るまでを四里とす。

第四日

柿坂より……羅漢寺……下關まで

五月四日 晴

午前六時一同旅館を出で、直に驛に到りて乗車す。車窓より投筆岩の絶景を眺むる程に、汽車ははや柿坂を發せり。又何時來らんとも期し難ければ、名残を惜みつつ、刻一刻と此の絶景に別れ行く。心なき汽車はひた走りに走りて、懸程もなく羅漢寺驛に達す。これより我々一同は、下車す。さて羅漢寺に詣で、青の洞門を通過し、樋田驛に出で、再び乗車せんと欲す。驛を距ること數丁にして、一大橋を架す。即ち羅漢寺橋なり。これより一條の路を辿り、行くこと二十町にして、鬱蒼たる山麓に到る。重き足を引きつりつつ急坂を攀ち登りて、終に山門をくぐる。寺は山に据り、山を懸ちて洞壑橋梁の状を作る。堂内に入れば、左に岩を削りて刻める五百羅漢あり。やがて案内者に連れられて堂奥を巡る。奥は眞闇にして、階段を或は昇り或は降り、左に折れ右に曲りて行くほどに、漸くにして明るみに出づ。寶物をそこそこに觀覽して、一同此處を辭し、青の洞門へと向ふ。洞門は、下は清流に望み、上は絶壁を負ひ、其の規模誠に雄大なり。聞く此の洞門は、その昔僧羅海といふものの、獨力經營になりしものなりと、その義侠的努力には人をして畏敬の念を起さしむ。行くこと一町

て下車し、正午前山陽驛前なるかぶと橋に投宿す。午食後暫時休憩。午後一時中、新耶馬溪を探訪せんとて、古川先生を引導の下に、希望の者三十名ばかり、輕裝して出發す。路傍に鷹岩龍ヶ鼻などの奇岩あり。又家程の大岩突出せるあり。七福神の如きを七福岩、船の如きを船岩とす。高平和歌山は鷹岩と茂り、水晶の玉簾其の中に懸る。行くに隔つて兩側の山次第に迫り、右の山手を通る時は左を眺め、橋を渡りて左に至れば右を望む。時々頭上を仰ぎて今にも落ち懸らんとする奇岩に膽を寒からしむ。早梅橋に到る。柿坂より二里。兩側の山は愈迫り、壁の間を行く感あり。山盡くるかと思へば又開き、開くかと思へば又迫る。ここにも亦一曲は一曲より奇なるの勝を呈す。大岩を破つて生ひ出づる老松。木を壓して聳立立つ大岩。全山皆石にて猿の群りたるが如き群猿山、蓋に聳ゆる小猿山、絶壁の頂上に直立する茄子岩、怪石に經石を重ねし鷹巢山、二つ並べたる夫婦岩等何れ奇ならざるはなし。溪水の響は山彦と相應じて、美しき勇しき進軍の音楽を奏するが如し。皇太子殿下御休憩所附近より一つ屋までは、兩岸は木々枝を交ふると溪流の岩に激するとを見る。軍艦岩は此の間に於ける唯一の觀物なり。遂に深瀬橋に到る。下を流るる激流を鴨耳川とす。見上ぐれば數丈の絶壁にけなげに咲出でたる石南花あり。嗚呼、これ紅一點といはんか。歸途鹿鳴館の主人曰く、此處は高集の八景として、群猿山、小猿山、鷹巢山、茄子岩、仙人ヶ岩、尾長、四手の尾、海空嶺など、三國に誇る奇勝を一陣の下に見得る所にして、新耶馬溪中の最も佳景の地なりと、又同主人より我等一同に記念として繪葉書をくれたり。ここより歸途に就き、宿に歸

餘りにして、樋田驛に到着す。此處にて一同用意の費當を認め、汽車の來るを待ちて乗る。午前十一時前中津驛に達す。次の發車時間までには、二時間餘も餘裕あれば、自性寺なる大雅堂の書畫を觀覽す。書畫は襖などに貼付けられしものにて、何れも逸品と聞けど我等にはよく分らず。豫定の時刻に迫れば、一同再び驛へと急ぐ。間もなく列車來りたれば、皆々車中の人となりぬ。午後六時過下關驛。俵屋旅館に投宿す。午後八時より同十時に至るまで、自由散歩を許され、思ひ思ひに市況を見學せり。午後十時半就寢。

第五日

下關より萩まで

五月五日 曇

午前五時起床。朝食後直に停車場前に集合す。此時第五學年高田真雄君の父君より、一同に結構なる菓子をお贈せらる。謹んで其の厚意を感謝す。小郡驛に着せし頃より終に雨となり、午前十一時山口驛に下車せし際は、陰雨殊に激しく、剩へ此の日は山口招魂祭の當日なれば、行人絡繹として絶えず、爲に道路泥濘をなし、歩行頗る憚む。かくて、途中雨はやみなく、佐々並村を通過する頃より風さへいたく加り、衣服盡く濡び、歩を止むれば、忽ち寒氣を感じる程なり。萬難を排して八里の險路を突破し一同無事解散せしは、午後七時なりき。終に鷗み附派先生の客易ならざる御配慮を深謝す。

(自大正九年十一月
至大正十年十月)

劍道部記事

大正十年一月二十九日。寒稽古後大會を開く。受賞者次の如し。
一等賞 惠美須屋三吉(二年)、
二等賞 中川 長治 外四名、
三等賞 山縣 勝 外十三名、
大正十年六月二十四日。春季大會を開く。受賞者左の如し。
一等賞 瀨口 三郎 (二年)、
特別二等賞 森 豊彦 (五年)、
二等賞 下村 定徳(四年)、杉 丙三(三年)、
三等賞 江川 満一、外四名、
四等賞 末岡 源七、外五名、特別試合受賞者は一等山根
次郎(四年)、吉武惠一(五年)、
大正十年十月二十八日。秋季大會開催、受賞者左の如し。
一等賞 國弘重幸(五年)、二等賞 下村定徳、守重眞雄、
惠美須屋三吉、杉山直人、玉井忠彦、西山馨、宇田川重雄、
廣田一雄、櫻井平八郎、三等賞 山本馨香 外七名、

柔道部記事

大正十年一月二十九日。寒稽古後大會を開く、受賞者左の如し。

漕艇部記事

五月二十七日、海軍記念日を以て、吾が五百の健児は、初夏の
阿武川に壯絶なる漕艇部大會を催した。午前七時半登校、校長の
訓話があつた。夫より各中隊、隊伍整然として川の兩岸に陣ご
る。此日波無く、天氣晴朗、四方の連山緑に萌れて、阿武の河水
藍色又鮮か。時は至れりいざや奮はん健児の戲腕。午前九時漕艇
開始。銃聲一發又一發、吉野、金剛、比叡、笠置の四隻は水を蹴つ
て進む。その勇まじや。第八回と第九回との間、午前十時五十分
第二對第四中隊の選手競漕を行つた。兩岸の應援頗ぶる盛んに、
今年は破格で、石油罐、太鼓を打つて聲も囀れん許りに努めた。
第二中隊は比叡、第四中隊は金剛、その結果十四秒の差で、第四
中隊の勝利となつた。紫の旗は高く舞ふた。競漕は回を逐ふ毎に
興味益々深く、洋々たる樂隊の音は、ゆるく流れて、人に山に水

に歡喜の響を傳へる。第十一回と第十二回の間、午後一時四十五
分、第一對第三中隊の選手競漕となつた。第一中隊は金剛、第三
中隊は比叡である。激戦の結果、三十五秒の差で第一中隊の大勝
その後數回して、職員競漕、來賓競漕、及び卒業生競漕等いづれ
も痛快で一入の興であつた。午後五時十九分、最後に月桂冠を争
ふべき中隊選手競漕を開始する。第一中隊は比叡、第四中隊は金
剛である。兩岸の赤旗、紫旗は狂せん許りに踊つて、應援の聲凄
しく、折から沈む夕陽を浴びて、選手の前には必勝の色が浮んで
居た。嗚呼今度の一漕、中隊の名譽の爲、「南無八幡」を念する選
手の姿は、壯にして又悲なるものである。號砲一發、二隻は夕潮
滿々たる上を滑つて進んだ。後に二條の直線を發して、叫ぶ聲、
石油罐、太鼓の音、旗の閃き、名譽ある金星は、遂に第四中隊の
上に飾られた。敗れた者の悲しみ、然り意氣と意氣との衝突であ
る。誰か感激の涙なしで見ざる者があらうか。而して中隊個人競漕
成績は、第一中隊は十八點、第二中隊は二十七點、第三中隊は二
十點、第四中隊は二十八點で、之れ亦第四中隊の勝利、その得意
や想ふべし。午後六時橋上に集會、我帝國海軍万歳及我漕艇部万
歳を三唱して閉會した。かくて光榮ある日は暮れた。吾等の胸に
或物を肝銘して。
(野村龍介誌す)

野球部記事

野球部大會たる中隊試合は、六月十三日午後三時半より、三中
隊對四中隊の選選に戦の幕を切る。審判は野球部長舟木先生。四
中隊の先攻。三中隊の三點に對し、四中隊七點を得、四中隊の勝。

三 四 弘 阿 高 佐 坪 阿 大 島
隊 中 村 中 武 田 木 井 川 橋 本
P C IB IIB SS LF CF RF
四 長 田 堀 岩 石 福 久 倉 丸
隊 中 嶺 中 堀 田 田 原 田 重 尾
四 十 三 一 三 五
〔評〕勝敗の数が明らかであつたので、興味が少なかつた。然し
三中隊がこんな不振ひな、而も少しも統一的練習をしないで、
これまで奮戦したのは、記すべきことだ。野球は能迄も、團體的
であるから個人の技よりも、寧ろチームとして揃はねばならぬ。
即ち、チームワークが何より必要である。この點は非常に遺憾で
あつた。中隊試合と云ふ見地からして、野球争覇戦に對しては、
他のそれよりは、甚だしく輕視せられてゐるのは、残念である。
吾人は、敢て星を望む者ではないが、矢張り一つの星が名譽ある
中隊旗に輝くのである。少しは熱心に練習し、聲援せよ。
六月二十日午後三時三十分より、一中隊對二中隊の選選試合を
行ふ。審判舟木先生(球)石田(壘)一中隊の先攻。一中隊一、三、九
回に得點ありて十點を算せしに反し、二中隊最後に一點を得し
みにて、十對一にて、大勝す。

中一	杉 北 彌 玉 石 堀 松 杉	四 十 六 三
隊 中	山 村 重 木 井 森 永 岡	二 十 六 三
二	P C IB IIB SS LF CF RF	打 安 三 四
隊 中	武 壁 山 黒 鈴 河 篠 吉 松	數 打 振 球 死
隊 中	田 崎 田 川 木 東 原 武 屋	五 十 三 五 十 零

〔評〕この試合も亦緊張せぬ試合だつた。二中軍投手は、初めは肩が定まらず、一中軍に亂打されたが、四回以後は全く一中軍をして凡打に終らしめ、僅か九回に一點を許したのみであつた。一中隊は、捕つたチームではあるが、打撃の不振は心細い。守備はアガル事さへふくば比較的固い。

六月二十二日、午後三時中より、一中隊對二中隊の決勝試合を行ふ。審判舟木先生。一中側先攻。五回迄に兩軍各々三點を得て後九回に及ぶも得點なく、頼る接戦を演じ、兩軍頓に緊張す。一中側必死となりて、最後の總攻撃に移り、一死後、走者二三塁に據りしも走者出過ぎて、三塁に憤死して、石井の一壘軟弱球に好機を逸す。この裏、四中軍岩田死球に出でしが破綻の因となりて無死満塁の好機四中軍を襲ふ。四中軍後援團の狂喜に反し、一中軍には英語に無し。一球又一球終にバットの響と共に、凱歌は四中軍に揚る。即ち村木の内野捕球に岩田生還し萬事休す。然れども未だ無死。一中軍の最後の奮闘も何の効無く、横く安打と凡失に五點を加へて、服の襟は閉づ。あはれば深し激戦の跡。勝者の歡喜敗者の悲哀。嗚呼、勝つべきは戦なり。かくして副権は再び四中隊へ。

四死球	1	0	0	0	1	0	1	1
三振	1	1	0	0	2	0	4	1
安打	1	2	1	1	0	1	1	1
打數	4	5	5	4	4	3	4	3
隊一	森	岡	村	井	重	永	山	木
隊二	北	石	堀	堀	永	山	木	杉
Total	37	8	10	3				
回	數	123456789	計					
一中隊	000120000	3						
四中隊	101100005	8						

閉會。今回は辯士多數なりし爲か。聴衆の態度に緊張の度を缺きし傾あり。且つ時間不足の爲、辯士は其の意志を十分に發表する能はざりしは遺憾なり。將來兩者の自重を望む。
本日のプログラム左の如し。

- 一、開會の辭
- 二、私が見た萩中學生
- 三、吾々は客となつた心
- 四、Hans the Shepherd Boy (三等)
- 五、世界を家とせよ
- 六、覺醒 (二等)
- 七、運命 (四等)
- 八、學生諸君
- 九、題知らず
- 一〇、我等と歌 (四等)
- 一一、頼山陽岸駒の義なき (四等)
- 一二、勇氣 (二等)
- 一三、公徳 (二等)
- 一四、俠客大元祖 (四等)
- 一五、日米の風雲と吾人の覺悟
- 一六、The prince and the Judge (二等) 五ノ一
- 一七、贈玉 (三等)
- 一八、恐るべし「恰ンド」の一語 (三等)
- 一九、敵を見て立つ
- 二〇、萩中學生論

- 土肥 先生
- 山田 毅
- 波田 繁夫
- 藤井 勝二
- 宇津卷隆臣
- 吉武 惠市
- 中川 長次
- 杉山 直人
- 鬼武 幹亮
- 村木 曠
- 三原 清治
- 永見 直人
- 長濱 誠三
- 守重 直雄
- 岡 智教
- 杉山 元彦
- 小方 忠勝
- 篠原 勝利
- 上田 正夫
- 古本 武男

四死球	1	0	1	0	0	1	0	0	3
三振	0	1	0	1	1	1	1	2	0
安打	1	0	0	1	0	1	1	0	7
打數	4	5	3	4	4	4	3	4	35
隊一	堀	丸	岩	田	中	重	木	長	
隊二	石	田	倉	村	長	福	原	石	
Total	35	5	7						
回	數	123456789	計						
一中隊	000100000	7							
四中隊	101100005	35							

（観の勢）矢張り一中隊は打撃が悪い。不揃だ。安打は四中隊よりは多いが、得點に關係したのは半數のみ。打つべき時に打たずして、幾度か好機を失してゐる。即ち打撃にムラがある。九回の裏に於ては、四中隊の鋭鋒に流石の堅壁も全く蹂躪せられた。そして平凡な捕球飛球の、ダブルプレーが出来る様な場合に投すべき壘に投ぜずに、二者を生かしたことが多々あつた。然し打撃の研究如何に依つては、恐るべきチームである。四中隊は堅實なバツテリーと、一壘の堅城で充分な餘裕があり、且因襲的の強味も加はつて、初めから敵を壓迫してゐた。打撃も何處となく強い。何しろよい取組である。平素試合の数が少く、試合馴れもせず、自己の缺點にも氣が付かないで居るから、少しでもヒンチが襲ふと、凡失が生ずるのである。故に練習試合を、少くとも一週に一回位、常に統一的、規則正しい練習をして、自己の缺點を知り敬訓を得るのが必要である。また迷へ度い事もあるが、此の位で擲筆する。

辯論部記事

六月十六日午前九時より春季辯論大會開會。午後四時二十分無事

- 二一、秋吉鍾乳洞を見て 五ノ三 津田 龍夫
- 二二、海國の民 (三等) 二ノ一 山本 浩
- 二三、高い山から (三等) 五ノ三 宮内 謙吉
- 二四、狂人たれ愚人たれ (三等) 五ノ三 仁尾 重親
- 二五、人生と娛樂 三ノ二 山崎 正
- 二六、國難來る 二ノ一 山本 斌
- 二七、聖められたる魂 (一等) 五ノ三 高田 真雄
- 二八、修學旅行談 四ノ三 藤田 昇
- 二九、討論題我國の將來は工業か農業か 四年 生
- 飛入
- 三〇、仙人の偶感 五ノ一 松屋 鶴吉
- 三一、さ々採 三ノ二 繩田 寛悟
- 三二、偶感 伊藤 先生
- 三三、偶感 山本 校醫
- 三四、閉會の辭 土肥 先生

此の外討論に於て賞を得し者

- (二等) 四ノ三 岡 智教
- (二等) 四ノ一 山本 越夫
- (高田真雄記す)

書道部記事

我が書道部は、例年の如く、十月十八日の開校記念日をトして、其成績品展覽會を催され、午前九時より、午後五時まで、一般公衆の觀覽を許されたり。此日曇天なりしかども來賓、生徒の父兄

及び書に趣味を有する人等の來場せらるゝ者多く、殊に光榮とする所は、萩高等女學校長が其校の習字科教師をして態々參觀せしめられしことなり。其出品物は、主に、昨年の展覽會後に於て、一定の時間内に、教師監督の下に數回書したるものの中より、選出したるものなり。而して、一年間に課せられたるもの、内にて選拔を受けたるものは、七回の者七人、六回の者十一人、五回の者二十四人、四回の者二十五人、三回の者四十二人、二回の者五十九人、一回の者百九人なり。今其成績を、學年別、及中隊別に表記すれば、左の如し。

學年	一等	二等	三等	等外	總學年人員	入選品總數
第五學年	一	一	七	四二	八五	一〇四
第四學年	一	二	一五	五〇	八九	一七六
第三學年	一	九	一〇	三四	一一一	一七〇
第二學年	一	六	六	四九	一三一	一六二
第一學年	一	三	六	三三	一五〇	七八
計	五	二一	四四	二〇八	五六六	六九〇
中隊	一等	二等	三等	等外	總人員	入選品總數
第一中隊	〇	三	一〇	六二	一四〇	一八一
第二中隊	三	六	七	五一	一四三	一五八
第三中隊	二	七	一六	四二	一四七	一七〇
第四中隊	〇	五	一一	五三	一三六	一八一
計	五	二一	四四	二〇八	五六六	六九〇

(石津兵太郎誌す)

書道部記事

十月十八日、吾校開校記念日を記念する爲、吾が書道部は、成績品展覽會を催した。一年間の眞摯と苦心との内に、心の美を寫し出した書は、如何程までに、觀者の期待にさうた事であつたらう本年の出品人員二百六十四人、出品總數三百九十五点にして、隨分筆致の非凡なものも見受けられた。もとより學校授業時間中での、製作品ばかりであるからして、輪廓たる作品こそ見あたらなかつたが、何れも、各人の個性を發揮してゐたのが何よりであつたと思ふ。それで本年は、個人批評は止めにして置くが、一方家庭製作品が、あまり振はなかつた様に思はれた。勿論特志隊の出品はあつたが、あれでは、まだ飽き足らぬ感がある。明年からは今一層奮つて、出品せん事を希望する。因に本年各中隊成績を左に示す。

中隊	壹等	貳等	參等	有望	出品者人員
第一中隊	一	六	一〇	一四	七二
第二中隊	一	三	九	一二	六三
第三中隊	一	七	一五	一〇	六三
第四中隊	二	四	一一	一四	六六
合 計	五	二〇	四五	五〇	二六四

(藤原勝利誌す)

地歴部記事

我が地歴部成績品は、例年の如く、本校創立第二十二週年を卜し

て、午前九時より午後五時まで、一般觀覽を許した。

出品物は、四年以下で、既修部事項、及び郷土史に關する地圖地誌と、模型圖との外に、地歴部よりの二三品であつた。生徒成績品中、一等の部に屬するものは五名で、四年島居君作「日本のカールスト地方」、三年齋頭君作「倭山村模型圖」、同じく三年堀永君作「舊秋明倫館の圖」、二年山根君作「萩町新地圖」、一年大和君作「關東地方地圖」で、共に精巧極致、刻苦の跡が歴然として現はれてゐた。二等十五名、三等四十一名あつたが、多くは一二年生で一般に上級生には少なかつた。又生徒製作品以外の、長州三大奇蹟の寫眞、並に繪葉書は、多數の觀客の足を止めて、その地にあるの思あらしめた。思ふに本年は、夏期休業中の宿題として課せられたものでなく、隨意製作であつた爲めか、昨年比して聊か遜色あるやうに思はれたが、郷土史の編纂が多く、また贅澤に流れた作品の絶無であつたのは、大いに喜すべきである。終りに來年度には、我部の爲めに、諸君一層の奮勵あらんことを切望す。

(服部達太郎誌す)
(木原秀雄誌す)

理科部記事

例年の如く、我が部は十月十八日の本校第二十二回開校記念日を機として、展覽會を催せり。當日午前九時より午後五時まで、物理化學生徒實驗室に於て、生徒製作品、並に理科學器械、博物標本、簡單なる實驗裝置等を陳列して、公衆の隨意觀覽に備へたり本年の生徒製作品中、最も冠たりしは、五年生の杉山君の物理公

式一覽表、及び萬國原子量表、四年生の藤井君の考案になれる電氣應燈(花一朵)にして、その卓越せる筆のあと、その撓まざる努力、共に驚となすに足れり。本年の生徒出品は、僅少にして、漸く五指を屈するに過ぎず。昨年のそれに比すれば、一大減退と言はざるを得ず。されど、本年は、理科に特別の趣味を有する者のみの出品なりき。理科學器械は、昨年に殆んど同じ。博物標本は、公衆衛生、常識油養を目的とし、生徒實驗は、酸素水素の製法、簡單なる染色法を試みたり。此くして、我が部の、一年に唯一の展覽會も、寂寞たる終りを結びぬ。切に望む。明年は今年にも勝る進歩發展を爲さん事を。

(喜本義正誌す)

陸上運動會記事

大正十年十月十八日、第二十二回陸上大運動會が舉行せられた。此の日照りもせず、さりとて降りし雨も絶好の運動日和で、六百の健兒は、運動熱の觀物たるを禁じ得なかつた。午前九時生徒一同は、各中隊別に運動場に會し、微風に翻々たる校旗を掲げ、記念歌を合唱した。終れば直ちに競技に著手し、一發の號砲空中に轟くや、早速二百米を以て戦の幕は切られた。時に九時四十分號砲又號砲、競技は次第に白熱化し、やる者も應援する者も皆一生懸命である。呼出の勞苦と、各自の自重とで、競技は豫定以上に進捗した。かくて午を過ぎる頃より、次第に觀衆は其數を増し午後に至れば、さしも廣き運動場も、立錐の餘地なき光景を呈した。團體競技としては、一、二、三年の体操がよかつた。マラソン、百碼、砲丸投等色々新しい競技が、本年から加へられ、觀衆の

目をひいた。盲啞競走は中々滑稽であつた。二年全体の百足競走は殊にさうである。愈々見事な中隊教練となつた。其の秩序の整然たるは、軍規の嚴肅なるは、以て平素の訓練を伺ふに足る。此より先、午前中に、小學校生徒の選手競走の豫選が開かれ、午後に至つていよいよ其決勝戦となつた。特に今年には優勝旗が出来たので、何れも必勝を期して、之が獲得に熱中し、参加校も大井白水、樺西、奈古、川上、明倫、樺東、佐々並等の數校に達し、應援團も多少あつて、一入緊張の度を高めた。かくて筑砲合團に接戦は開かれたが、最後の勝利は、尋常科は明倫に、高等科は大井の手に歸し、夫々優勝旗を授けられた。遂に本日の最終をかざる、血湧き肉躍る中隊選手競走が来た。應援歌に送らるゝ選手の顔には、何れも必勝の色が表はれてゐる。然し何れが三つの中隊は、敗者の運命に陥るは當然のことで、其定まる時は、刻一刻近づきつゝある。観衆は今か今かと待つてゐる内、俄然砲一發、四つのユニホームは、見事にスタートを切つた。脱兎の如き疾走選手も應援者も共に気がきではない。一回二回先づ四中軍の旗幟色めき、三、四、五回は漸次二中軍他を凌いで居たが、最後の八回目には、第四中軍の勇者河上君、疾驅遂に第二中軍の山根君を抜き、其覇權は第四中軍の手に歸した。而して各選手の勇戦奮闘は大いに稱讃すべきものがあつた。かくして戦は終つた。時に午後五時。一同集合して校歌を合唱し、校長の講評を聞き、解散した。仲秋の指月山には白煙たなびき、空は次第にたそがれて行く本日選手競走のタイム左の如し。

第八十三回 中隊選手競走(千六百米リレー)

京都青年演武大會記事

大正十年八月、京都武徳殿に於て、第二十二回青年演武大會開催せらる。本校出演選手氏名及成績左の如し。

劍道部 國弘重幸(勝)。 下村定儀(分)。 守重眞雄(勝)。
伊藤貞一(負)。 惠美須屋三吉(勝負負)。

團體試合。第一回京都第一高。第二回愛媛師を屠り、第三回戦に於て三軍師に敗らる。

柔道部 村木正七(勝)。 長嶺武四郎(勝)。 河内健吉郎(勝)。
堀上孝助(勝)。 秋枝純逸(勝)。 有志参加、倉重新治(分)。

團體試合。第一回鳥取中。第二回嘉穂中。第三回岐阜中。第四回徳山中。第五回滋賀師に勝ち、最後優決勝戦に於て富山中學に敗らる。

第一着 第四中隊 四分二秒
第二着 第二中隊 第三着 第一中隊 第四着 第三中隊
番外 尋常小學校選手競走(八百米リレー)
第一着 明倫 二分十一秒五分ノ一
同 高等小學校選手競走(千六百米リレー)
第一着 大井 四分五十一秒五分ノ四

尙個人競走に於ては、第二中隊が勝星を得た。障礙物競走に、出動の少かつたのは遺憾であつた。(石津兵太郎誌す)

山口縣體育大會記事

大正十年十月十六日、第七回山口縣體育大會開催せらる。今回我々校選手の成績は、平素の鍛錬其の鍛を奏し、孰れも優秀の技術を見せたるは、誠に本校の名譽と云ふべし。將來益々奮勵努力してより以上の好果を齎さんこと、切望の至に堪へず。左に本校出演選手の氏名及び成績を掲ぐ。

- 劍道 國弘 重幸 江川 精 佐々木正秀 守重 眞雄
田邊 秀雄 山根次郎
柔道 河内健吉郎(勝) 吉田 博 濱野 道介
長嶺武四郎(勝) 村木 正七(拔試合第二等賞)
秋枝 純逸(勝)
走技 二百米 石田 明 玉木利夫(以上一等) 内藤貫之(二等)
四百米 石田 明 河上春亮(以上一等) 玉木利夫(三等)
八百米 森 豊彦(一等) 武田憲雄(二等)
千五百米 河上春亮(一等)
一分間競走 中川長次(三等)
マラソン競走石丸孝一(三十等)
リレー 森 豊彦 玉木利夫 河上春亮
石田 明(以上一等)
ハードル 武田憲雄 村上定介(以上一等)
松本喜八郎(二等)
- 跳躍技
走幅跳 内藤 貫之(十八尺五寸二分)(一等)

投擲技

走高跳 松本喜八郎(十八尺四寸)(二等)
村上定介(四呎十一吋)(一等)

砲丸投

松本喜八郎(三等)

左の一篇は、第五學年森生の物したるもの、一讀當日の眞相の如知たるものあるを覺ゆれば、茲に掲載することとせり。

山口縣下體育大會出場記

(前略)午前十時號砲一發、競技は二百米より開始せられたり。この競技たるは、短距離を疾走することなれば、其の勝負目にも止まらぬ程なり。第九回に我々校選手内藤君あり。縣下一の稱ある又野某と、僅か五分の一秒の差にて第二着となる。第十一回に石田君、第十三回に玉木君あり。二人とも優に第一着を占めたり。やがて四百米競走開始せらる。第十九回に石田君、第二十回に河上君、第二十一回に玉木君あり。石田河上兩君、これまた第一着、玉木君二百米の疲勞未だ恢復せず、惜しくも第三着となる。此の間フィールドには、砲丸投に松本、走幅跳に内藤、松本、走高跳に村上の諸君あり。内藤村上の兩君、奮戦して、見事縣下のレコードを破り、縣下第一等の榮冠の戴く。松本君、砲丸投走幅跳に力闘し、砲丸投は第三等、走幅跳は第二等となる。此の間幾度かフィルムは回轉して、八百米競走は始りぬ。第三十回に森君あり。第三十二回に武田君あり。森君怒々としてテープを切る。武田君惜しくも第二着たり。第三十八回千五百米競走に河上君あり。得意のライスト、ヘビー功を奏して、第一着を占む。此の間、我が應援

國、此の續々たる入賞に、喝采すること其の極度に達し、狂せんと欲する者の如し。一分間競走に中川君あり。無開第三者を占むハードルに於ては、第四十六回武田君、第四十七回内藤君、第四十八回に松本君あり。何れも第一二着を占めて、意氣軒昂なり。午後零時四十分、本日の呼者たる中等學校一哩リレーあり。五組づつに分れて、マイルレースを行ふ一の津浦城中等學校四分一秒五分の三にて勝ち、本日の優勝我が物顔なり。二の組に我が校あり。驚れて後己む決心にて、必勝を期し出場す。時は刻々と迫り、殺氣漲りし頃、忽ち肺臓を衝く銃聲にスタートを切る。一回、二回、三回、四回。嗚呼我れ遂に勝ちぬ。石田君見事に、敵に第三コーナーに追付き榮あるテープを切る。拍手喝采の時暫しは鳴も己まざりき。やがて我れ中等學校第一着の宣言あり。我が選手の意氣天を衝く有様なり。十重二十重の觀衆の拍手に送迎せられて、トラツクを一一周す。午後一時四十分より、第二の呼者たるマラソン競走始りぬ。距離二里半餘、豊浦郡青年團岡野某三十八分二十五秒にて餘裕綽々としてゴールに入れり。我れ選手石丸君最年少の身を以て、百五十人中の三十等なりしは多とすべきなり。かくて競技は全部終を告げ、最優勝者に褒状を授與せられて、午後五時中閉會せり。

大正九年度校友會役員

會長 岩田 校長
副會長 頼野 教諭
創造部長 岡部 教諭

委員	國弘重幸	佐々木正秀	岩田芳夫	松本喜八郎
	田村 豊	小野道治	郡野勝彦	長瀬俊二
	玉井忠彦	多田義男	守重胤雄	惠美須三吉
	小方敦馬	神野克巳	藤村五郎	岸 音照
	守重光雄	阿武義輔		
柔道部長	青野 教諭			
委員	倉重新治	濱野道介	河内隆吉郎	上野玉市
	吉田 博	繼鐵之進	秋枝純逸	長嶺武四郎
	北村三郎	西村秀隆	原龍三郎	土田伊平
	竹内六郎	佐伯義治	西田義雄	村木喜八
	岡村 登	末永 備		
辯論部長	土肥 教諭			
委員	宮國秀彦	吉武惠市	伊藤喜兵衛	村木 曠
	宮内謙吉	高田真雄	山本越夫	鬼武幹雄
	岡 智教	松尾松千代	山崎 正	齋藤龜治
	横山幸生	野村久一	白上章正	永見眞人
	波田繁夫	長濱誠三		
書道部長	安藤 教諭			
委員	石津兵太郎	山根真一	上野玉市	柴田敏夫
	高田真雄	鈴木 薫	稲田保治	藤井勝三
	竹内忠雄	仁保 彌	岡村 敏	北村三郎
	多田義男	井町 勇	有田勝正	津田巖男
	關 信常	紀藤克三	横山幸生	瀧口三郎
	中村 征	佐伯義次	吉田 勇	山本 啓
庭球部長	相島 薰	中村重藏	山根芳雄	山田勝彦
委員	河東清春	田中 稔	石田 明	岩田芳夫
	田村 豊	堀 豊治	大橋一夫	仁保 彌
	頼野孝夫	藤田吉長	守重胤雄	弘中 勝
	清水保一	岩田貞夫	多田利雄	津田秋雄
	山田 明	櫻井平八郎		
野球部長	船木 教諭			
委員	山田 毅	田中 稔	石田 明	堀 豊治
	松本喜八郎	島本竹次郎	久保田五六	長嶺武四郎
	坪井乘雄	藤村四郎	杉 丙三	弘中 勝
	山本 教諭	副長 相島 薰		
漕艇部長	山田 毅	江川 精	河内健吉郎	武田憲雄
委員	北川武彦	繼鐵之進	村木正七	堀上孝助
	河上春亮	山田清華	藤田 昇	堀 敏
游泳部長	井村 教諭			
器具係	河野 教諭	落合 教諭		
委員	佐々木正秀	濱野道介	能美 潔	島中善隆
	井原師郎	小野道治	瀧口寛作	秋枝純逸
	津崎平八郎	波多野義貞	山根芳雄	田坂達次
	藤井 教諭	大本 教諭		
褒賞係	藤井 教諭			
委員	惠本義正	内藤貫之	安藤次郎	柏木直甫
	吉田 博	鈴木 薫	山中 茂	吉村侃二
	兼田重徳			

中村十郎	井上昌夫	有美 逸	松井利明
富田節美	市原茂樹		
書道部長	田總 教諭		
委員	國弘重幸	田中商一	吉村喜熊
	藤原勝利	田中俊治	稲田保治
	堀永忠太郎	高尾日出彦	横山秀雄
	大橋辰治	平林三七雄	伊藤恒夫
	竹内七三郎	板垣 肇	三原清治
	谷川 清	中村 征	阿武四郎
	中村十郎	津田秋雄	松浦架三郎
	松本 博	河村祥三	佐伯雅夫
雜誌部長	金子 教諭		
委員	市川 旦	石津兵太郎	吉武惠市
	柴田敏夫	石井 淳	野村龍介
	高田真雄	藤井勝三	山中 茂
	柿並武夫	鳥居 勝	田坂達次
地歴部長	古川 教諭	副長 森本 教諭	
委員	神田善治	安藤次郎	平山 保
	水原秀雄	服部達太郎	伊藤貞一
	澁谷 清	倉重達郎	大谷正信
	香川俊男	田村季雄	平田保雄
理科部長	落合 教師	副長 田中 教諭	
委員	神田善治	惠本義正	中村俊雄
	野村龍介	内藤貫之	村上定介
			瀧口寛作

委員	國弘重幸	佐々木正秀	岩田芳夫	松本喜八郎
	田村 豊	小野道治	郡野勝彦	長瀬俊二
	玉井忠彦	多田義男	守重胤雄	惠美須三吉
	小方敦馬	神野克巳	藤村五郎	岸 音照
	守重光雄	阿武義輔		
柔道部長	青野 教諭			
委員	倉重新治	濱野道介	河内隆吉郎	上野玉市
	吉田 博	繼鐵之進	秋枝純逸	長嶺武四郎
	北村三郎	西村秀隆	原龍三郎	土田伊平
	竹内六郎	佐伯義治	西田義雄	村木喜八
	岡村 登	末永 備		
辯論部長	土肥 教諭			
委員	宮國秀彦	吉武惠市	伊藤喜兵衛	村木 曠
	宮内謙吉	高田真雄	山本越夫	鬼武幹雄
	岡 智教	松尾松千代	山崎 正	齋藤龜治
	横山幸生	野村久一	白上章正	永見眞人
	波田繁夫	長濱誠三		
書道部長	安藤 教諭			
委員	石津兵太郎	山根真一	上野玉市	柴田敏夫
	高田真雄	鈴木 薫	稲田保治	藤井勝三
	竹内忠雄	仁保 彌	岡村 敏	北村三郎
	多田義男	井町 勇	有田勝正	津田巖男
	關 信常	紀藤克三	横山幸生	瀧口三郎
	中村 征	佐伯義次	吉田 勇	山本 啓
庭球部長	相島 薰	中村重藏	山根芳雄	山田勝彦
委員	河東清春	田中 稔	石田 明	岩田芳夫
	田村 豊	堀 豊治	大橋一夫	仁保 彌
	頼野孝夫	藤田吉長	守重胤雄	弘中 勝
	清水保一	岩田貞夫	多田利雄	津田秋雄
	山田 明	櫻井平八郎		
野球部長	船木 教諭			
委員	山田 毅	田中 稔	石田 明	堀 豊治
	松本喜八郎	島本竹次郎	久保田五六	長嶺武四郎
	坪井乘雄	藤村四郎	杉 丙三	弘中 勝
	山本 教諭	副長 相島 薰		
漕艇部長	山田 毅	江川 精	河内健吉郎	武田憲雄
委員	北川武彦	繼鐵之進	村木正七	堀上孝助
	河上春亮	山田清華	藤田 昇	堀 敏
游泳部長	井村 教諭			
器具係	河野 教諭	落合 教諭		
委員	佐々木正秀	濱野道介	能美 潔	島中善隆
	井原師郎	小野道治	瀧口寛作	秋枝純逸
	津崎平八郎	波多野義貞	山根芳雄	田坂達次
	藤井 教諭	大本 教諭		
褒賞係	藤井 教諭			
委員	惠本義正	内藤貫之	安藤次郎	柏木直甫
	吉田 博	鈴木 薫	山中 茂	吉村侃二
	兼田重徳			

會計係 原田 書記
庶務係 三輪 書記 錦見 書記

大正九年度秋中學校々友會費收支決算書

一金千六百九圓拾五錢五厘	收入高
內譯	
金六拾四圓四拾壹錢五厘	前年度繰越金
金千參百貳拾參圓四拾五錢	職員生徒會費
金貳百貳拾壹圓貳拾九錢	雜收入
一金千四百六拾七圓五拾壹錢五厘	支出高
內譯	
金百貳拾八圓四拾貳錢	劍道部
金百拾圓六拾五錢	柔道部
金五拾圓參拾五錢	庭球部
金八拾五圓八拾四錢	野球部
金百五拾參圓參錢	短艇部
金百四拾七圓參拾七錢	雜部
金參圓九拾八錢	辯論部
金貳圓六拾八錢	書道部
金七拾錢	圖書部
金貳百八拾圓六拾九錢	運動部
金百六拾七圓貳拾參錢	褒賞部
金貳百拾六圓五拾七錢五厘	雜費
金五拾圓也	基金蓄積費

金七拾圓也
金百四拾壹圓六拾四錢
以上
短艇蓄積費
豐年度へ繰越

大正九年度秋中學校々友會基金收支決算書

一金四千六百五拾圓九拾九錢	收入高
內譯	
金四千參百五拾七圓參拾四錢	前年度繰越金
金貳百九拾參圓六拾五錢	本年度實收高
內	
金五拾圓也	經常費ヨリ蓄積
金貳百四拾參圓六拾五錢	預金及證券利子
一金四千六百五拾圓九拾九錢	支出高
內譯	
金八拾貳圓五拾錢	經常部運動費へ充用
金四千五百六拾八圓四拾九錢	豐年度へ繰越
以上	
大正九年度秋中學校短艇蓄積費收支決算書	
一金貳百貳拾七圓拾七錢	收入高
內譯	
金百五拾圓貳拾參錢	前年度繰越金
金七拾圓	經常費ヨリ蓄積
金六圓九拾四錢	預金利子
一金貳百貳拾七圓拾七錢	支出高

○各中隊學科成績調查左表の如し。

大正九年度第二學期各中隊學科成績表		
順位	中隊號	受驗人員
一	四	一二九
二	二	一一三
三	一	一一一
四	三	一二六
合計		九二〇五
平均點		七一・四
大正九年度學年各中隊學科成績表		
順位	中隊號	受驗人員
一	三	一二九
二	四	一一一
三	二	一二五
四	一	一一二
合計		九一四三
平均點		七〇・九
大正十年度第一學期各中隊學科成績表		
順位	中隊號	受驗人員
一	四	一三四
二	二	一四五
三	三	一四五
四	一	一四〇
合計		九二〇一
平均點		六八・六六

武道寒稽古出勤狀況表

(甲) 出席者一日平均數調	
劍道部	柔道部
大正八年 延人員 二七〇 部員數 二七〇 百分比 共 二四日	大正八年 延人員 二四三 部員數 二四三 百分比 共 二四日
大正九年 延人員 二四三 部員數 二四三 百分比 共 二四日	大正九年 延人員 二四三 部員數 二四三 百分比 共 二四日
大正九年 延人員 二四三 部員數 二四三 百分比 共 二四日	大正九年 延人員 二四三 部員數 二四三 百分比 共 二四日
(乙) 皆勤者調	
劍道部	柔道部
大正八年 皆勤者數 九六 部員數 二七〇 百分比 三三	大正八年 皆勤者數 八九 部員數 二四三 百分比 三六
大正九年 皆勤者數 一〇五 部員數 二四三 百分比 四三	大正九年 皆勤者數 一〇九 部員數 二四三 百分比 四五
大正九年 皆勤者數 一〇五 部員數 二四三 百分比 四三	大正九年 皆勤者數 一〇九 部員數 二四三 百分比 四五

(自大正九年十一月
至大正十年十月)

○明治神宮鎮座遙拜式。大正九年十一月一日午前第八時半より、明治神宮鎮座遙拜式を舉行す。勅語奉讀及び學校長の、明治天皇の聖德鴻業、明治神宮御造營の由來等に關する訓話あり。午前九時半結了す。

○松陰先生追慕式。十一月二十一日例に依り、松陰先生追慕式を舉行す。吉田教諭の講話あり。終りて教員生徒一同松陰神社に參拜す。

○宇佐川政輝氏講話。十一月二十五日世界一周自轉車旅行家宇佐川政輝氏來校。生徒に對し一場の講演をなし、多大の感動を興へたり。

○角視學委員來校。十二月六日廣島高等師範學校教授角視學委員來校。數學科の教授を視察す。

○伊東本縣視學員來校。十二月七日山口高等學校教授伊東視學員來校。國語及漢文科の授業を視察す。

○發火演習。十二月九日午前九時半より、川上村京床及び佐古方面に於て、第四五學年の發火演習を行ひ、午後三時半結了す。
○共通比較試驗。二月四日五日の兩日に亘り、縣下各中學校の第

四學年生に就き、學力共通比較試驗行はる。試驗科目は、英語國語及漢文數學の三科なり。
○長距離競走。二月十日午前八時半より萩一周長距離競走を行ひ同十一時無事結了す。成績左表の如し。
長距離競走成績表 大正十年二月十日施行

等級	出發	隊員	不參加	出發	落伍	到着	時間	平均
順	隊	員	人員	人員	人員	人員	時間	一人
第一等	第一隊	二〇	一	一九	一	二〇	五、三〇	一、五七五
第二等	第二隊	二〇	一	一九	一	二〇	五、三〇	一、五七五
第三等	第三隊	二〇	一	一九	一	二〇	五、三〇	一、五七五
第四等	第四隊	二〇	一	一九	一	二〇	五、三〇	一、五七五
合計	八〇	四	四	七六	四	八〇	五、三〇	一、五七五

○春日神社參拜。三月三日皇太子殿下御渡歐御發駕當日に就き、一路御平安の御祈願をなす爲、午後一時半より、教員生徒一同春日神社に參拜す。
○卒業式。三月五日第二十一回卒業式を舉行す。其の状況左の如し。

式は午前十時に開始せらる。知事代理として、中谷理事官臨場、百餘名の來賓あり。例に依り校長勸語を奉讀し、卒業生六十八名に證書を授與す。次ぎて、知事代理の贈賞與規程に據れる褒狀、校長賞品、同窓會長の賞品等の授與あり。終りて校長の講話、長官の告辭、來賓總代小倉信繁氏生徒總代高田真雄君の祝辭、卒業生總代岸田隆吉君の答辭、保證人總代森重哲雄氏の挨拶等、豫定の如く進捗し、同十一時三十分無事結了す。

長官告辭

諸子所定ノ課程ヲ修了シテ茲ニ卒業ノ榮ヲ荷フ諸子並ニ父兄ノ喜察スヘク本官亦衷心欣快ノ情ヲ以テ之ヲ祝シ所懐ノ一端ヲ告ク
今ヤ大戰終熄セリト雖其ノ影響ハ全世界ニ波及シ思想界經濟界ハ動搖シテ沈靜ノ域ニ至ラズ此ノ間ニ處シ五大強國ノ一トシテ將來益々國際間ニ重キヲ加ヘ帝國ノ使命ヲ全セムトス邦家ノ前途多事ナリト稱スベク國民ノ責務更ニ大ナリト謂フヘシ

校長告辭

卒業生諸君、余は約五年間、學校長として、諸君の爲に、幾多の話をしたのであります。諸君も既に聞き飽かれたであらう。余も實は草臥れたのである。けれども、今日は、此の長い間の縁故を一應打ち切つて、諸君と別れるに就ては、最後の言

凡ソ國運ノ進展ハ國民全部ノ一致協賛ニ由ルト雖國民ノ中堅タル新進氣鋭ノ士カ崇高ナル目的ヲ確持シ至誠奉公國民活躍ノ先驅者トシテ渾身ノ努力ヲ獻クルニ待ツ所更ニ緊切ナルモノアリ是レ國家カ中堅國民ノ育成ニ深ク留意スル所以ニシテ諸子ノ任洵ニ重大ナリト謂ハサルヘカラス望ムラクハ諸子進ミテ高等ノ學府ニ入ルト將タ社會ノ實務ニ從事スルトヲ問ハス國家内外ノ情勢ニ顧ミ健全ナル思想ヲ懷抱シ眞摯緊張ノ態度ヲ以テ益々人格ノ修養ニ勉メ愈々知見ノ研鑽ニ勵ミテ以テ國家ノ隆昌ニ寄與セムコトヲ

大正十年三月 日 山口縣知事從四位勳三等 中川 望

葉として、一言餞別をせねばならぬのであります。さて、獨逸のカイゼル、ウイールヘルムは、亂暴と野心との二つの大きな棒を兩手に持つて、世界を掻きまはしたのであります。其の腥い血の波は、日本にも及んだのであります。所が人々の精神の根柢には、それ以來、非常の不安を生じて、精神的動亂は、今迄に無い程、漲つて居るのであります。其の主な原因として、服従と犠牲との二つの大きな基礎がぐらついた爲に、今日見る様な未曾有の精神上の不安を來したのであります。一寸こゝに斷つて置きますが、服従は盲従とはちがひあります。又犠牲とは、打算的の考ではなくて、利益を棄て苦痛を忍んで、多くの周圍の爲に盡すのであります。此の二大精神が缺けて來た爲に、今日の様な妙な現象を來したのだと信じます。諸君將來假令世界が如何に亂れやうとも、長い間我國に養ひ來つた此の二大精神の根柢を動搖させる様なことがあつてはならぬのであります。此の二大

精神は、家族制度の根本でありまして、之を盡すことは、國家を脊負うて立つ者の、重要な義務と信するのであります。今後、諸君は、如何なる方面に向ふも、此の二大精神に就き、沈思熟考して之が發揮に務め、益々國家の爲に貢獻せられるやう切望に堪へませぬ。之を告辭とします。

卒業生の氏名左の如し (イロハ順)

- | | | |
|-------|-------|--------|
| 板垣 堯 | 池内 茂 | 岩武 且 |
| 岩武 忠幸 | 井本 清 | 長谷川徳太郎 |
| 西田 六夫 | 堀 八樓 | 戸倉芳太郎 |
| 戸田 巖雄 | 富田 正次 | 大藤 豪 |
| 龜田 久雄 | 金子 榮一 | 金子 幸夫 |
| 河村 東一 | 田中 清 | 田中 秀光 |
| 高津 壹熊 | 津森 三郎 | 永富 三介 |
| 長井 博通 | 中村 彰 | 中野 廣 |
| 中谷 由路 | 中原 義胤 | 村田 春二 |
| 村木 義雄 | 上田 太平 | 上田 信彦 |
| 植村 文穂 | 植田 浩 | 熊井 孝三 |

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 藏田 芳朗 | 桑原 松式 | 山縣 正一 |
| 山縣 政 | 山根 幸雄 | 山田 一郎 |
| 山中 吉郎 | 松井 安廣 | 松原 梓 |
| 松岡 雄二 | 松屋初五郎 | 増野 節兼 |
| 藤田 良平 | 藤本 善一 | 福江 榮人 |
| 小島 金作 | 厚東誠七郎 | 寺田 俊三 |
| 天野 敏介 | 阿武 俊雄 | 阿部 弘 |
| 佐々木博介 | 櫻井 武三 | 岸田 隆吉 |
| 宮本 千秋 | 三好 章 | 三上 直行 |
| 田 美稻 | 篠原 智雄 | 守重 哲眼 |
| 守田 吉光 | 師井 圭一 | 鈴木 博 |
| 鈴木 研介 | 相本 吉之 | |

受賞者左の如し
 一褒状 (縣知事より授與せられし者)
 藤川良平
 身體強健操行善良ニシテ能ク學業ニ勵精シ其ノ進歩顯著ナリ
 仍テ之ヲ賞ス
 一言海 一部 (特別賞)
 藤田良平
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力優秀ニシテ伍長トナリテ
 能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス

一和英辭典 一部 (一等賞)
 岸田隆吉 柴田美稻
 學力優秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)
 一筆記帳 一冊 (二等賞)
 山縣 政 戸田巖雄 小島金作 厚東誠七郎 松屋初五郎 金子幸夫 板垣 堯
 本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)
 一筆記帳 一冊 (三等賞)
 厚東誠七郎 戸倉芳太郎 藤田良平
 平素勤勉ニシテヨク校則ヲ守リタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)
 一卒業生寫眞 一葉 (同窓會獎學賞)
 岸田隆吉 藤田良平 柴田美稻 板垣 堯 戸田巖雄 厚東誠七郎
 山口縣立秋中學校卒業ノ際優秀ナル成績ヲ得ラレ洵ニ後進ノ模範トシ依ツテ前記ノ物品ヲ贈呈シソノ名譽ヲ表彰ス (各通)
 ○陸軍記念日三月十日、陸軍記念日に就き、生徒を講堂に集めて、學校長の講話あり。
 ○賞品授與式。四月八日、始業式後引續き賞品授與式舉行せらる受賞者左の如し。
 一筆記帳 四冊 (特別賞)
 第三學年 福田幹雄 水原秀雄 第二學年 井町勇 土田伊平

第一學年 橫山幸生 山本 馨香
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力優秀ニシテ伍長トナリテ
 能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ授與ス (各通)

一筆記帳 三冊 (一等賞)
 第四學年 高田真雄 吉武惠市 上野玉市 第三學年 藤井勝三
 第二學年 有田勝正 第一學年 中村 征
 學力優秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ
 盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ授與ス (各通)

一筆記帳 二冊 (二等賞)
 第四學年 椿 正義 第三學年 領野孝夫 吉村恒介 村上定介
 稻田保治 第二學年 齋藤龜治 池田謙藏 來島勝男 迫山六
 郎 津田嚴男 第一學年 大谷正信 谷田篤士 野村久一 木
 島俊雄 瀧口三郎 那須武夫
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ
 盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ授與ス (各通)

一筆記帳 一冊 (三等賞)
 第四學年 岩田芳夫 小川 薰 市川 且 村木 曠 伊藤喜
 兵衛 堀 豐次 石津兵太郎 野村龍介 篠原勝利 平田久
 一 柴田敏夫 石井 淳 藤田健一 第三學年 服部達太郎
 瀧口寛作 小野基治 山本起夫 箭島 薰 柿並武夫 林木
 正七 岡 智教 岡村 斌 第二學年 守置眞雄 伊藤貞一
 伊藤恒夫 杉 丙三 平村三七雄 鹿島國好 板垣 肇 田
 原節夫 弘中 勝 第一學年 市川 浩 松浦 正 多田利雄
 吉崎道雄 倉重達郎 西田義雄 福田幸雄 御園生晃

安達丙作 山縣 勝 内山 誠 田北 泰
 木島久一
 本學年間活動セシヨリ之ヲ賞ス (各通)
 一修身教科書 一冊 (同窓會獎學賞)
 第四學年 吉武惠市 村木 曠 椿 正義 高田真雄 上野
 玉市 第三學年 水原秀雄 藤井勝三 領野孝夫 吉村恒助
 福田幹夫 第二學年 井町 勇 板垣 肇 杉 丙三 土田
 伊平 有田勝正 第一學年 野村久一 多田利雄 山本 馨
 中村 征 橫山幸生
 本學年優秀ナル成績ヲ得ラレタリ依リテ前記ノ物品ヲ贈呈シ
 テ之ヲ表彰ス

○學友長選舉 四月二十八日學友區正副長の選舉を行ふ其
 の結果左の如し。
 東萩學友區長 田中 教諭
 第一小區學友長 福原 行徳 副長 田中 徳三
 第二小區學友長 北川 武彦 副長 田坂 達次
 南萩學友區長 金子 教諭
 第一小區學友長 田村 豐 副長 波多野義實
 第二小區學友長 仁尾 重視 副長 松尾 忠義
 第三小區學友長 平島信千代 副長 山中 茂
 西萩學友校長 橋本 教諭
 第一小區學友長 岩田 芳夫 副長 小川 薰
 第二小區學友長 藤田 健一 副長 堀 豐治
 北萩學友區長 伊藤 教諭

本年學問伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物
 品ヲ授與ス (各通)
 第四學年 小野道治 河原八重次 原田 潔 内藤軍吃 隔
 元保 伊藤信雄 第三學年 服部達太郎 瀧口寛作 山本起夫
 吉村恒助 村上定介 箭島 薰
 本學年間室長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品
 ナ授與ス (各通)
 一賞狀 (四等賞)
 第四學年 柏木直甫 第三學年 三浦不二夫 山中茂 鳥居勝
 田阪達次 神代龍雄 松崎彌太郎 橫山秀雄 第二學年 吉賀
 春一 齋藤 彰 濱野三郎 青木 弘 篠原茂雄 中村 修
 田中照一 中村靜雄 百濟茂友 内田益夫 紀藤克三 大谷
 三熊 兼田 功 第一學年 西山 馨 阿部悌甫 常川 治
 弘長賢一 藤井清貞 田中 誠 吉田市丸 齋木 豐 中野
 元祐 堀 文吾 馬來 誠 能美隆義 吉村 博 寺戸英雄
 鳥尾甚一 吉田 勇 中村義治 常川 明 三島文平 大藤
 貞夫 長瀬 誠 吉見宣一 小川忠勝
 平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍テ之ヲ賞ス (各通)
 一賞狀 (等外)
 第四學年 岩田 芳夫 小野 道治 中島 善廣
 第三學年 波多野義實 山根 熊藏 玉木 利夫
 第二學年 丸尾 誠二 西島 丈夫 橫山 吉郎
 第一學年 恒遠 雄碩 廣田 一雄 井上 信治
 上田光雄 金子 矩郎 河野 健夫 山田 哲

第一小區學友長 惠本 義正 副長 門田 省三
 第二小區學友長 篠原 勝利 副長 玉井 忠彦
 第三小區學友長 鳥本竹次郎 副長 伊藤喜兵衛
 中萩學友區長 安藤 教諭
 第一小區學友長 吉武 惠市 副長 吉田 博
 第二小區學友長 田中 南一 副長 野村 龍介
 第三小區學友長 上野 玉市 副長 藤村 正憲
 椿東學友區長 落合 教諭
 第一小區學友長 鈴木 勲 副長 齋藤 政武
 第二小區學友長 村木 曠 副長 安藤 次郎
 第三小區學友長 井町 吉助 副長 村田 清男
 椿學友區長 田總 教諭
 學友長 山根 次郎 副長 吉村 喜照
 山田三見學友區長 山本 教諭 副長 神代 龍雄
 第一小區學友長 武田 憲雄 副長 惠美須屋三吉
 第二小區學友長 江川 精 副長 惠美須屋三吉
 ○修學旅行、五月一日、第四學年修學旅行隊、金子、古川、山本、
 黒川の四教諭引率の下に、四泊五日の豫定を以て、大分縣大分方
 面へ出發し、五日無事歸着す。(修學旅行記参照)
 ○志都岐山神社參拜、五月十七日、毛利敬親公五十年祭執行につ
 き、放課後第二學年生徒全部を代表し、志都岐山神社に參拜す
 ○毛五郎來校、五月二十日、毛利五郎來校せらる。
 ○陸軍歩兵少佐林茂清氏來校、五月二十四日、熊本陸軍幼年學校

75

生徒監主事陸軍歩兵少佐林茂清氏來校視察せらる。
 ○松陰神社參拜。五月二十五日、松陰神社祭禮につき、放課後、
 教員生徒一同參拜す。

○文部省督學官來校。六月六日、文部省督學官西川順之氏來校。
 主として數學科の視察をなす。

○弘道館長來校。六月十四日、弘道館長嘉納治五郎氏來校。

○防長教育會理事來校。六月二十七日、湯淺防長教育會理事來校
 生徒に對し一場の講話あり。

○國司陸軍少將來校。七月六日、防長武學生養成所山口支部主管
 國司少將來校。武學志望生徒に對し訓示する所あり。

○河内陸軍中將來校。七月十三日、當地出身河内陸軍中將來校、
 生徒に對し一場の講演あり。

○皇太子陛下御歸朝奉祝式。九月三日、午前八時
 より皇太子殿下御歸朝奉祝式舉行。殿下の御賢德

上觀三千年之往古、下開三千年之來今、
 左踏西洋之極、右踐東海之垠、天日敷
 首、皇靈存心、噫、同斯存心、宇宙一默
 吉田松陰

に就き、學校長より一場の講演あり。終りて教員
 生徒一同春日神社に參拜して祝賀の誠を致しぬ。
 ○本縣視學來校。九月二十六日日本縣視學水沼正一氏來校視察。
 ○開校記念式。十月十八日午前八時より、第二十二回開校記念
 式を舉行す。來賓五十餘名。校長の式辭に次ぎて、來賓總代小倉
 萩町長の祝辭あり、同九時終る。式後校友會の催に係る陸上大運
 動會生徒學藝品展覽會室あり。
 ○田中陸軍大將來校。十月三十一日午前八時、田中陸軍大將來校
 天長節祝日拜賀式に參列せられ、一場の講話あり。(談話欄參照)
 ○感謝狀傳達式。十月三十一日、第四學年生益田致義に對し、感
 謝狀傳達式はる。右は十月八日阿武郡川上村字相原部落出火の
 際、逸早く村役場に届付け、重要書類を搬出して、其の類焼を免
 れしめし盡力に對し、森川上村長より、箱一個に感謝狀を添へて
 其の傳達方を依頼し來りしに依る。

彙報

○更迭。大正九年十一月より大正十年十月に至る滿一箇年間に於
 ける先生の更迭左の如し。

△種谷先生。二月十二日附にて依願退職となる。

△木下、夏原兩先生。三月二十四日、木下夏原兩先生の告別式あ
 り。木下先生は郷里なる長崎縣立島原中學校に、夏原先生は滋
 賀縣立八日市中學校に、何れも轉せらる。

△山本、伊藤、石川諸先生。四月八日、山本、伊藤、石川三先生の紹
 介式はる。山本先生は嘗て本校に奉職せられたる事ありしが
 其の後愛媛、岡山の師範學校に轉せられ、今回再び我校に赴任
 せられたるなり。擔當學科數學、伊藤先生は福岡縣立嘉穂中學
 一學より轉せらる。擔當學科英語、石川先生は擔當學科英語修身

△山田先生。四月二十一日、山田先生の告別式あり。先生は這般
 福岡縣立八幡中學校に赴任せられたり。

△吉田先生。五月二十一日附を以て福岡縣立西國東高等女學校教
 諭に任ぜらる。

△中津江先生。五月二日中津江先生の紹介式はる。先生は本校
 第十七回卒業生にして、當度阿武郡立高等女學校より轉せらる
 擔當學科歴史、國語及漢文。

△藤田先生。六月十五日紹介式はる。擔當學科數學。

○卒業生本年度上級學進學校者左表の如し。

學校名	氏名	卒業年度	學校名	氏名	卒業年度
山 高	幸月富士昌	二	日本醫專	加川 古	八
外 語	進藤 常雄	五	山 高	鹽見正一郎	八
山 高	藤村 六雄	六	美 術	堀 徹一	八
水 講	伊藤 敏三	六	山 高	綿谷 誠一	八
青 學	世真 和男	八	明 大	田中 彌次	八
美 術	松村 六郎	八	四 高	三浦 一夫	八
明大隈	都野 豊	八	早 高	山本登代治	八
○明大隈	野村 茂	八	長崎醫專	阿武 俊雄	九
南滿醫	松原 梓	九	廣島高工	堀 八樓	九
長崎醫專	小島 金作	九	山口高商	池内 茂	九
全	上田 信彦	九	外 語	山 縣 政	九
外 語	金子 榮一	九	皇學館	中原 義胤	九
山口高商	藤田 真平	九	山 高	山根 幸雄	九
山 高	柴田 美裕	九	五 高	板垣 堯	九
五 高	金子 幸夫	九	五 高	岸田 隆吉	九
明 大	植村 文雄	九	六 高	寺田 俊三	九
山師二部	岩武 且	九	選 練	楳本 吉之	九
明 大	烏田 潔	八	○陸士	椿 正義	九
○山 高	伊藤 巖	九	○海兵	市川 且	九
○海 兵	伊藤 信雄	九			

今回、高尾剛十郎、瀧口吉良、林安三郎三氏が協議の上、士氣獎勵元氣鼓舞の目的を以て、我校友會に寄贈せられたるものなり。旗は濃小豆色の鹽瀬に文字徽章を白く染め抜き、千段巻録付の黒竿に着けたるものにて、極めて壯麗なり。余輩は之が爲に我が陸上大運動會に一層の光彩を添へしことを三氏に向つて深く感謝するものなり。

○卒業生死亡。大正九年十一月より大正十年十月に至る滿一箇年間に於て死亡せし卒業生左の如し。茲に掲載して追悼の意を表す。
 梅田 文武君 第十九回卒業生 六月二十九日病死
 伊藤 實三君 第十四回卒業生 九月十二日病死
 多田 俊雄君 第十三回卒業生 九月 日病死
 茶川 一君 第二回卒業生 十月二十八日病死

○寄贈雜誌。左の諸雜誌は、本會に寄贈せられたるものなり。茲に掲載して其の芳志を感謝す。

- 校友會雜誌 第六十三號 下關商業學校校友會
- 校友會雜誌 第六十四號 下關商業學校校友會
- 校友會雜誌 第二號 第三號 山口高等學校校友會
- 校友會雜誌 第四號 山口高等學校校友會

- 保惠會雜誌 第一百十四號 愛媛松山中學校保惠會
- 校友會會誌 第二十號 山口岩國中學校校友會
- 校友會雜誌 第十三號 山口周陽中學校校友會
- 校友會雜誌 第二十四號 山口縣立大校 友會
- 學友會報 第六十五號 山口商業學校學友會
- 校友會雜誌 第十九號 山口豐浦中學校校友會
- 會 報 第二十八號 大日本武德會本部
- 早稻田學報 每 號 早稻田大學校友會
- 三田評論 每 號 慶應義塾大學
- 知道月報 每 號 茨城水戸中學校知道會

會 告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は九月末日までとす。用紙隨意。
- 二、本誌の發行は毎年十一月とす。

大正十年十二月十五日印刷
 大正十年十二月二十日發行
 〔非賣品〕

發行兼編輯者 山口縣阿武郡樺村 三輪 勗

印刷者 山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地 大津 い わ

印刷所 全上 山口響海館

